李自成及張獻忠の叛

たり。

後ち神宗崩して、光宗嗣ぎ、光宗亦忽ち崩じて、喜宗(一六二一——一六二八)之に代はるに至り東林黨は、三挨(挺擊)紅丸、移宮)を論難して、再び勢力を朝廷に收めたりしが、反對黨は、宦者魏忠賢と結托して、其の內閣を破り、所謂邪人名簿なる者を作りて、殺戮禁囚を恣にせり。

第三節　思宗(一六二八——一六四五)の時に至り、魏忠賢及び其黨與は、悉く貶殺せられて、黨人跋扈の難は、消滅せしと雖、延安の張獻忠、及米脂の李自成は、同時に狹西より起りて、流賊の長となり、頻りに諸方を侵して、天下の大患をなせり。但し其の初めに當りては自成、等勢ひ尙ほ未だ弱く、幾度か官軍の爲に擊破せられて、或は降り、或は叛きしと雖、十有餘年を經るに及んで、軍勢漸く當り難く、陝西地方は云ふに及ばず、四川、湖廣、河南、等の諸省に至る迄、皆其の害を被らざるはなきに至れり。

思宗の末年に至り、獻忠は病を以て死せしといへども、自成は益强盛にして、西安に據りて、大順王と稱し、遂に北侵して、京師に迫れり。然るに、官軍之を拒ぐこと能はずして、帝煤山に自頸せしかば、自成乃ち太子を虜にして、自ら帝位に上れり。

○清人の南下

第四節　是より先き、滿洲に在りては、太祖既に崩じて、太宗(一六二七——一六四四)之に代はり、西は元の後裔察哈爾部を伐ちて、蒙古傳國の玉璽を收め、南は朝鮮を降して始めて國號を清と改め、又屢明を侵して、河北、山東の七十餘郡を蹂躪し、黑龍江北の索倫も、賀蘭山下の蒙古人も、皆等しく其の威命を奉ずるに至れり。西紀千六百四十三年、太宗崩じて、

翌年世祖(一六四四——一七二三)嗣立し父祖の遺志を繼ぎて、大に南伐の師を興し、睿親王多爾兗をして、之を率ゐて遼河に次せしめたり。

時に明の北京は、李自成の爲に迫られしを以て、對清の將吳三桂は急に軍を收めて、之が援に向ひたりしが、途にして京城既に陷りて、帝煤山に崩御せりと聞き、乃ち喪を發して、清に降り、其援を請ひて、專ら內賊自成の討滅を謀れり。是に於て、清は直に其の請を納れ、多爾兗をして三桂と共に進みて、自成を破らしめ、自成西走して、陝西に入るに至り、世祖は都を北京に遷して、悉く河北の地を定め、且つ自成を潼關に破りて、全く其の師を滅せり。

第五節　斯くて、天下は殆ど清に歸せしと雖、明人尙ほ福王を南京に立てゝ敢て清に降らざりしかば、世祖は兵を遣はして、之を陷れ、福王を蕪湖に虜にし、悉く杭州以北の地を定めて、嚴に剃髮の令を布けり。

然るに、明の遺臣之に屈せずして、更に唐王を福州に立て、魯王は紹興に在りて、之に應じ、勤王の士また各地に並び起りて、江西、浙江、福建、等の諸地を固守せしかば、世祖は諸將を分遣して、西は四川を平げ、東は浙江、江西を降し、遂に福州及び紹興に迫りて、唐王を汀州に捕へ、魯王を舟山に逐へり。是に於て明の遺臣は桂王を肇慶に立てゝ恢復を圖りしと雖、清兵復紹興を陷れて、桂王は廣西に走り、舟山も亦陷りて、魯王は厦門の鄭成功に投ぜり、成功乃ち魯王を奉じて、其軍勢一時は四方に振ひ、鎭江、南京、等も再び其の有に歸したりしが、久しからずして、清兵之を臺灣に逐ひ、桂王は緬甸に逃れて、吳三桂の爲に擒殺せられたり。

第五章　元明の文化

儒學

第一節　元の儒學は、新生面を開きしにあらず、唯だ姚樞、吳澄、許謙、等ありて程朱の學を傳紹せしに過ぎざりしが、明に至りて、太祖は大に學校の制を整へ、成祖は四書大全、五經大全、性理大全、等を作らしめて、之を大小の學校に配附せしかば、儒學漸く振ひて、遂に姚江、河東の二學派を生ずるに至れり。　河東派の祖は薛瑄にして、姚江派の祖は、有名なる王陽明なり。　瑄は醇儒にして、偏に程朱を祖述し、躬行復性を以て、主眼となしゝと雖、陽明は之に反して、陸象山に基きて、更に一機軸を出し、良知、良能を以て主眼となせり。

文學

第二節　元の詩文は、見るべき者少しと雖、戲曲、小說は、此頃より文學の一要素となれり。　當時、戲曲には、南北の兩曲あり、南曲は高則誠の琵琶記を首とし、北曲は王實甫の西廂記を冠とせり。　又小說には、施耐庵の水滸傳ありて、結構、文字共に千古に冠絕せり。　明に至りては、詩文大に振ひて、方孝孺、高啓、李東陽、李樊龍、王世貞、等の諸家を出し、戲曲、小說も亦盛に行れて、西遊記、金瓶梅、等の奇書を出せり。

喇嘛教の達

第三節　喇嘛教は、佛教の一派にして、祈禱禁咒を主とせる者なり。　阿輸迦王の、嘗て小乘教を興隆せしめし結果として、印度の チベット は盛なる佛教國となりたりしが、西紀七世紀に至りて、其の餘勢、ヒマラヤ山北の西藏に及び、六百三十二年には、西藏王親ら使を遣はして、經典を チベット に求めしめたり。

斯くて、佛教は、一旦王室の歸依を受けしかば、其後一たび異端の反抗に遇ひて、或は僧侶を逐はれ、或は寺院を毀たれ

しと雖、教勢敢て撓まずして、益全國に流行し、殊に千四百十九年以後は、法主は即ち國王なりしを以て、更に一層の隆盛を加ふるに至れり。而して元の世祖は西藏を征服するに及び、宗教を利用して、其の民を治むるの策を取り、教主八思巴を以て、帝師となしたりしかば、其の命令は詔勅と并び行はれて、喇嘛教は益振ひ喇嘛僧之に乘じて、往々凶暴をなすに至れり。

後ち元亡びて、明の興るに及び、教徒の横暴は漸く止みて、喇嘛教は紅、黄の二派に分裂せり。即ち紅教は八思巴の開きし者にして紅衣を着し、黄教は、宗喀巴の創めし者にして、黄衣を着せり。宗喀巴の出でし後は、紅教は痛く衰微して、黄教益國中に流行し、其の死するに及びて達賴喇嘛、及び班禪喇嘛の兩弟子、各其の統を受け、爾後は化身轉生を以て、世

基督教の再傳

々之を傳へたり。

第四節　基督教は、曾て景教と稱して唐に入り、武宗の時、佛教と共に斥けられて、全く廢絶せしが、元に至りて、再び東流して、中國に入れり。蓋し元の諸帝は、歴世宗教に對して、一視同仁の主義を執り、若し歐人にして、仕を求むれば、則ち之を任用して、政務を委ね、若し歐僧にして、布教を圖れば、則ち之を優遇して寺院の建立を許しゝ爲なり、

但し當時傳來の宗派は、フランシスコ及びチストリウスの二派にして、其の布教も未だ一地方に限りたりしが明に至りては、海上の交通も大に開け、東西の往來益頻繁となりしかば、ジェシウト派及びドミニシア派の僧侶も入り來りて、盛に傳道を試みたり。殊にジェシウト派のマテオリチの如きは、布教年久しくして頗る漢文に通じ、神宗に任

用せられて、欽天監となれり。

第六章　高麗及朝鮮の消長

高麗と蒙古との關係

第十一及十二地圖參照

第一節　是より先き、高麗には、李資謙、李義旼、崔忠獻、崔瑀、等の權臣相次ぎて起り、朝政日に非にして、國力大に衰へたりしかば、契丹の遺種之に乘じて、侵略を謀り、大同江を渡りて、溟州(江原道江陵府)豫州(咸鏡南道德原府)等を陷れたり。時に高麗は、高宗の世にして、殆ど之に報ゆるの策なかりしが、偶〻北方より成吉思汗起りて、其の急を救ひ、共に力を併せて、契丹を討滅せしかば、高麗は是より蒙古に歲貢して、其の德に酬いたり。而して蒙古は爾後益高麗の國事に干渉して、威を東方に張りしかば、趙暉は、和州(咸鏡南道永興府)を以て蒙古に降り、崔垣は、慈悲嶺(黃海道と平安南道との間)以北の地を以て元に降るに至れり。

元の東寇

第二節　高宗薨じて、元宗の立つに至り、元の世祖は、高麗を介して、日本を招致せしめ、元宗は命に從いて、之を日本に通じたりしが、日本其の招に應ぜざるに及びて、元は遂に東寇の大師を出せり。國史に文永及弘安の元寇といへる者、即是なり。文永の役に於ては高麗は兵士八千、船艦九百を發して、元軍と共に我國に入寇せしめたりしが、一夜暴風俄に起りて、全軍敗退せしを以て、世祖は更に再征を期して、征東行中書省を高麗に設け、元宗を以て、其左丞相となせり。

既にして、元宗薨じて、忠烈王立ち、元の公主に尚して、駙馬高麗王に進み、兵士一萬、船艦千五百を出して、弘安の元寇に加はらしめたりしが、暴風復た日本を惠みて、船艦悉く覆沒し、高麗の兵は幸にして全滅の厄を免かれしと雖、其の生還

高麗の衰亡

せしは、僅に三千なりき。

第三節　忠烈王は、後ち元の甘心を失ひて、元の爲に廢せられ、其後の諸王も、皆元の虐遇を被りて、敢て頭を上ぐる能はざりしが、恭愍王の時に至りて、元室漸く衰頽して、威令國外に行はれざりしかば、始めて元の年號を停めて、其の羈絆を脱せり。然れども、當時高麗は、内には金鏞、辛旽、崔萬生、等の姦臣あり、外には倭寇及び紅頭軍の侵入ありて、國勢益衰微せしかば、明の起るに及びて、復其の正朔を奉ずるに至れり。

然れども辛禑の時に至り、事に由りて明を怨み、兵を發して、遼東を攻めしめたりしが、其將李成桂、崔瑩、と共に遣中にありて、鴨綠江より軍を班へし、出師の不可を論じて、瑩を高峯縣(京畿道交河府)に流し、辛禑を江華島に移して、其の子昌

朝鮮太祖の外交

を立て、既にして復昌を廢して、恭讓王を立て、遂に其の禪を受けて、朝鮮の太祖となれり。時に西紀千三百九十二年なり。

第四節　太祖は、斯くして高麗に代はり、使を明に遣はして、國號及び册封を請ひしかば、明の太祖は、國號を朝鮮と賜ひ、尋いで册封使を派して、之を朝鮮王に封ぜしめたり。是に於て朝鮮は明と密着なる關係を生じ、歴世皆明に奉貢して、偏に恭順の意を表せり。

太祖は、啻に款を明に送りしのみならず、又使聘を通じて、好を日本に修めたり。是より先き、倭寇は黄海及日本海の沿岸に出沒して、大に高麗を苦め、朝鮮の興るに及びて、其の害益甚しかりしかば、太祖は使を日本に遣はして、海寇を禁じ、且つ隣好を修めん事を請へり。時に我國は、足利義滿將

壬辰の亂

軍の時代にして、始めは國際上の交通を忌みしと雖、後ち遂に使聘を交換して、共に明の藩王と稱せり。

第五節　斯くて、朝鮮は、歴世東西二國に通じたりしが、足利氏の末年に至りて、倭寇の甚しきが爲に、日本と絶ちて、專ら明に事へ、遂に昭敬王の時に至りて、豐臣秀吉の侵擊を被れり。當時秀吉は、既に國内を平定して、將に威を大陸に張らんと欲し、對馬守宗義智をして、先づ朝鮮の來聘を促さしめしかば、昭敬王は止むなく使聘を秀吉に通ぜり。然るに秀吉之に答書を與へて、異日征明軍の先鋒たらんことを命ぜしかば、王は大に驚きて、之を明に報じ、且つ邊備を修めて日兵の來擊を俟てり。

是に於て、秀吉は諸將を遣はして、直に釜山に上陸せしめ、諸將朝鮮の八道に分進して、京城忽ち陷落せしかば、昭敬王は義州に走りて、急を明に報し、明の神宗は李如松を遣はして、之を救はしめ、且つ沈惟敬に命じて、日軍の動靜を窺はしめたり。斯くて如松は進んで、小西行長を平壤に破りしと雖、幾もなくして小早川隆景の爲に、大に碧蹄館に破られしかば、沈惟敬之に乗じて、行長と共に和議を結べり。是に於て秀吉は、一旦諸軍を引上げしと雖、既にして條約齟齬して、復兵を朝鮮に送れり。然れども、後久しからずして、秀吉伏見に薨ぜしかば、日軍遂に素志を達せずして、歸路に就けり。

欽察國の興亡

第七章　西亞の大勢

第一節　欽察は、西紀千二百四十三年、拔都の封ぜられしに由りて、又金黨國ともいへり。國にして、横帳の金色なりしに由りて、其の地、西は　カルパチア　山脈に至り、東は　シル　河の下流

第十一圖照

に至り、ウォルガ河畔の薩來に都して、歐亞二州に雄視せり。

拔都死して、子措里答嗣ぎ、叔父別兒哥更に之に嗣ぎて、國勢益振ひ、嘗て基督教徒を虐待して、怨を羅馬法王に結び、其の十字軍を興すに先ちて、波蘭に侵入し、直に クラカウ を陷れて、歐洲諸國を威嚇せり。別兒哥死して、忙哥帖木兒嗣ぎ、海都及八剌と力を合せて、アム河畔の元領を分略し、孫月即別に至りては、婚を埃及、都爾格、莫斯科等の諸國と結び、好を歐洲列國の君主に通ぜり。

然れども、其後數世を經て、カルバの時に至り白黨汗圖克達侵入して、國命を傾け、尋で帖木兒の來寇ありて、金黨は益瓦解の運に向ひ、十五世紀の末には、アストラハン、カザン、クリーム の三國に分れ、アストラハン は、十六世紀の初めを以て亡び、カザン は其の中頃を以て亡び、クリームは

察合台伊蘭二汗國の末路

十八世紀の中頃に至りて亡べり。

第二節　察合台國は、八剌の時より、元に畔きて海都に通じ、或は トランスオキシアナ を略し、或は伊蘭汗阿八哈を征し、八剌の死せし後は、全く海都に屬して、共に元に抗したりしが、海都死して、其の子察八兒の元に降るに及び、國運漸く傾きて、元末には、殆ど四分五裂の有樣を呈せり。

次ぎに、伊蘭汗國は旭烈兀の子孫、世々位を踐みて、元室に忠誠を表し、ガザン の時に至りては、内は法度を改め、外は埃及と戰ひ、且つ回、基二教を優遇して、好を歐洲列國に通じ、國威一時は歐、亞、弗の三洲に振ひたりしが、其の後漸く衰へて、明初に至り、遂に帖木兒伯克の爲に征服せられたり。

帖木兒の勃起

第三節　帖木兒伯克は、西紀千三百三十六年を以て、サマルカンド の一郊村に生れ、察合台國の紊亂に乘じて、先づ

トランスオキシアナ を定め、尋で兵を出して、カシュガル、カリズム、コラサン、等の地を定め、遂に伊蘭汗國を滅して、西亞の大半を併せ、北は露西亞を征し、南は印度を侵し、西は オットマン 都爾格を討ちて、將に成吉思汗の遺業を復せんとせり。

帖木兒の北伐

第四節　初め求赤の長子幹兒朶、裏海、アラル 海の間より、烏拉河に至るの地に封ぜられて、國を白黨、又は東方欽察と稱したりしが、十四世紀の半に至りて、トクタミシュ 汗あり、曾て帖木兒の援助によりて、汗位を得しにも係らず、後ち欽察に克ちて、露國の諸侯を征服するに及び、帖木兒と ホラズム を爭ひて、其の領國に侵入せり。

時に帖木兒は、西征の師を率ゐて、波斯の イスパハン に在りしが、之を聞きて、直に進みて、トクタミシュ 汗を、アムメソポタミヤ、クルヂスタン、ジョルジャ、等の諸地を經て、欽察征討の途に上り、波斯、河畔に破り、後ち更に兵を整へて、欽察國に侵入し、立ろに之を陷れて トクタミシュ 汗を キエフ に逐ひ、且つ莫斯科及び アストラハン を略して、國に還れり。

帖木兒の南征

第五節　前編の末章に於て、既に之を概言せしが如く、此頃印度は トグラク 家の治世にして、國都南遷の爲に、人心益王室を離れ、内亂各地に起りて、之を鎮定すること能はざりしが、帖木兒は、之に乘じて、パンジャブ に侵入し、西紀千三百九十九年の春を以て、大に デリー（特里）を殺掠して還れり。

バヂャゼットの敗亡

第六節　是より先き、オットマン 都爾格は、蒙古人の爲に裏海の東岸より逐はれて、小亞細亞に入りたりしが、ムラド一世の出るに及んで、其の兵漸く強く、アドリアノープル

を取りて、スレース に侵入し、子 バジャゼット 之に嗣ぎて、兵威益振ひ、マセドニア、セッサリー、希臘、ボスニア、等を略して、將に コンスタンチノーブル に向はんとせしかば、羅馬帝は使を遣はして援を帖木兒に乞へり。

時に帖木兒は、印度より凱旋し、先づ バグダード の反亂を定めて、シリヤ、埃及、都爾格の三國を討平するの策を畫し、西紀千四百二年を以て、都爾格兵と、小亞細亞の アンゴラ に對戰し、大に之を破りて、バヂゼット を生擒せり。

其後帖木兒は、明を侵さんとして、東征の大師を興し、進んで シル 河を渡りて病に罹り、年七十を以て、遂に オトラー に死せり。時に西紀千四百五十年なり。

莫臥兒帝國の興起

第四及第十一地圖參照

亞克婆爾帝の政略

第八章　南亞諸國の變遷

第一節

帖木兒伯克の去りし後、印度は大に混亂を極め、トグラク 朝亡びて、ロデ（路提）朝之に代はり、庶民は其の暴虐に苦み、諸侯は獨立を謀り、遂に パンジャブ の總督度剌路提は カブール に到りて、婆伯爾の來征を請ふに至れり、婆伯爾は、帖木兒の玄孫にして、夙に大志を懷き、カブール を根據として、將に祖業を復せんとせしが、印度の衰亂を聞くに及びて、屢之に侵入し、西紀千五百二十六年に至りて、ロデ 朝を滅して、莫臥兒帝國を興し、都を デリー に定めて北天竺に君臨せり。

第二節

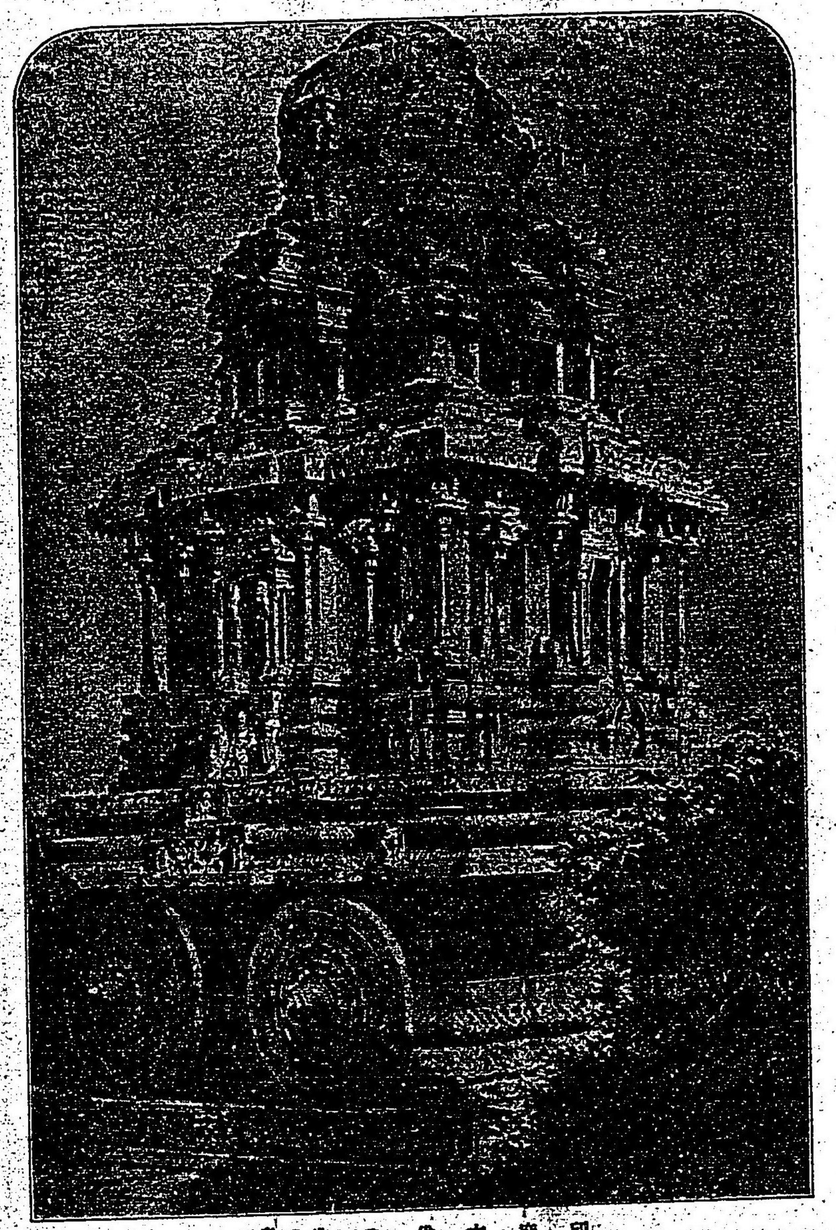
婆伯爾帝崩じて、太子弗馬暗帝位を嗣ぎ、反徒各地に蜂起して、國力痛く衰弱せしが、帝崩じて、太子亞克婆爾

の立つに至り、婆伯爾の遺業を恢復して、更に中天竺及東天竺の全部を平げ、都をアグラに遷して、專ら國民の撫育を圖れり。

印度人は、素と宗教的の國民なるを以て、回教徒の入り來りて、國を統御すること、當時既に五百年に及びしと雖、ラジプト人は尚ほ婆羅門教を奉じて、之に反抗したりしが、亞克婆爾帝は治國の秘術を了りて、信教の自由を許し、非回教稅を廢して、頻りに婆羅門教徒を登庸し、且つ務めて國民の古風、舊慣を保存したりしかば、印度人は皆帝の治下に悅服して、帝に奉ずるに大帝の號を以てせり。

第三節　亞克婆爾帝崩じて、太子西利牟嗣ぎ、父の遺業を順守して、世界征服者の尊號を受けたり。西利牟帝崩じて、太子澳具塞布嗣ぎ、英略父に勝りて、南天竺を平定し、都を

莫臥兒帝國の末葉



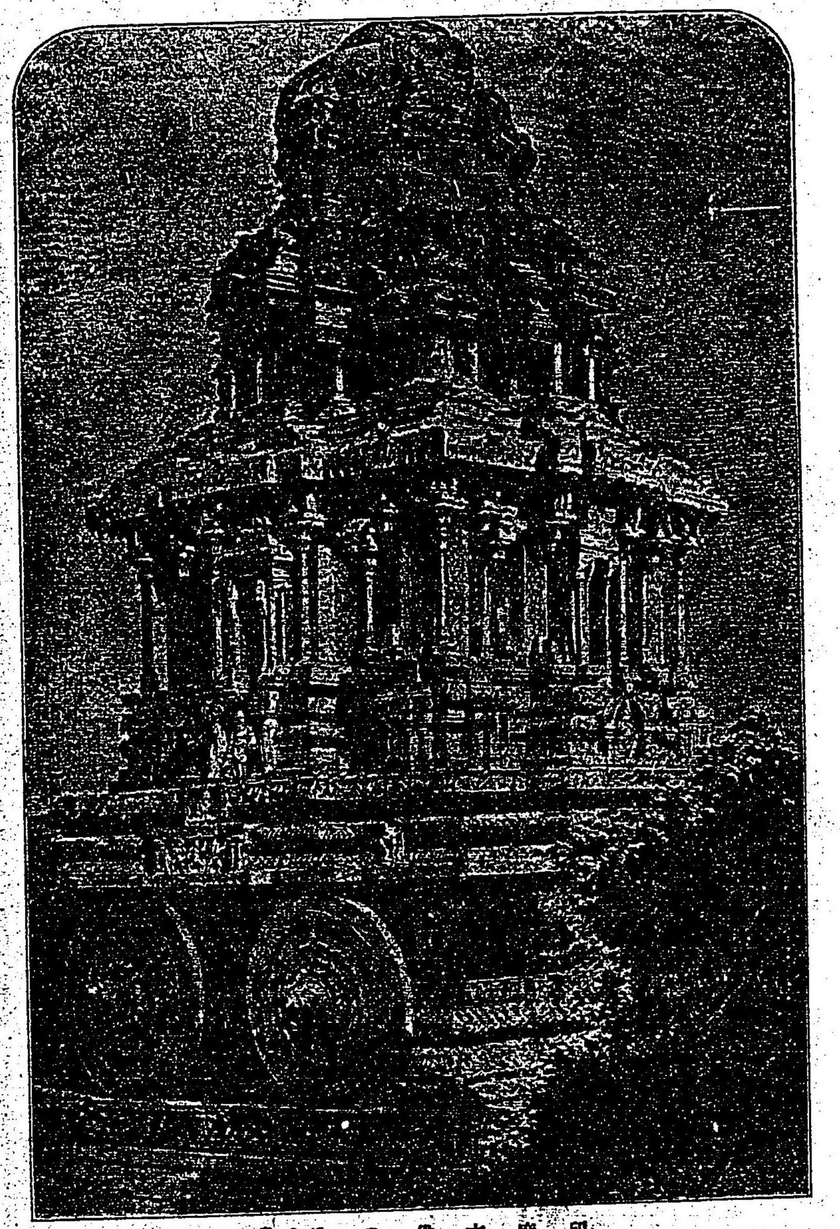
印度古代の佛堂

の立つに至り、婆伯爾の遺業を恢復して、更に中天竺及東天竺の全部を平げ、都を アグラ に遷して、專ら國民の撫育を圖れり。

印度人は、素と宗教的の國民なるを以て、回教徒の入り來りて、國を統御すること、當時既に五百年に及びしと雖、ラジプト人は尚ほ婆羅門教を奉じて、之に反抗したりしが、亞克婆爾帝は治國の秘術を了りて、信教の自由を許し、非回教稅を廢して、頗りに婆羅門教徒を登庸し、且つ務めて國民の古風、舊慣を保存したりしかば、印度人は皆帝の治下に悅服して、帝に奉ずるに大帝の號を以てせり。

第三節　亞克婆爾帝崩じて、太子西利牟嗣ぎ、父の遺業を順守して、世界征服者の尊號を受けたり。西利牟帝崩じて、太子澳具塞布（オーランゼブ）嗣ぎ、英略父に勝りて、南天竺を平定し、都を

莫臥兒帝國の末葉



印度古代の佛堂

デリーに復して、宇宙征服者の尊號を得たり。

然れども、帝は亞克婆爾帝の政策に反して、非回教稅を復したりしかば、ラジプト人之を怨みて、竊に マーラッタ 同盟を結び、帝の崩ずると共に、南天竺に起りて、各地の反徒を煽動せり。加之、波斯の ナザル、シャー は、其後來りて、デリーを殺掠し、阿富汗斯坦の アーメッド、シャー も亦尋いで來りて デリー 及び ヂャムナ 河谷を蹂躙せしかば、莫臥兒帝國は遂に衰弱して、諸侯其の命を奉ぜざるに至れり。

安南の上世

第四節 安南は古へ交趾、南交の二部に分れ、越裳氏の時より、既に周に朝せり。秦の始皇帝は、之を略定して象郡となし、漢興るに及で、高帝は趙佗を封じて、南越王となしたりしが、武帝は之を滅して、其地を分ちて郡となせり。光武の時、交趾反して馬援之を平げ、三國に至りて、吳は九眞及日南

第五、第六、第七、第九、第十一地圖參照

李陳兩氏の朝

の叛を平げ、吳の亡びし後は、晉之を承けて、宋、齊、梁、陳、隋、唐の六朝に傳へ、殊に唐は、之に安南都護府を置きて、益中國の治を布きたりしが、五代の時に至りて吳權自立して、始めて中國の治を離れ、後ち丁部領之に代りて、宋の太祖より交趾郡王に封ぜられたり。

第五節　是より先き、扶南及び林邑にも、各自立の國王ありて、唐の頃より、扶南は眞臘と稱し、林邑は占城と號したりしが、李氏の交都(今の東京)に據りて、大越國を建つるに至り、二國は其の討滅する所となりて、占臘といへり。然れども、後幾もなくして、陳氏、李氏に代りて、王位を繼ぎ、宋元二國の封を歴受して、安南國王となりしかば、占臘は再び其の舊に復して、各元の封爵を受け、元は安南行省を設けて、三國を統御せり。

黎氏の朝

後ち元亡びて明興るに至り、安南に黎李聲なる者ありて、國王日焜を弑し、自ら大虞王と稱して、明の封爵を受けたりしが、日焜の子天平明に至りて、實を明の成祖に訴ふるに及び、成祖は兵を遣はして、之を討滅せしめ、悉く其の地を收めて、十七府に分ち、交趾布征司を置きて、其の內政に當らしめたり。

第六節　然るに、成祖の任用せし知府中に黎利といへる者あり、成祖の末年より、反旗を飜して、明軍を破り、遂に陳日高を奉じて、外藩たらんことを宣宗に請ひしかば、宣宗は止むなく之を許して、日高を安南國王に封じたりしが、幾もなくして、利は日高を廢して、自ら大越皇帝と稱し、東京に都して、順天と改元せり。

其後、大越は益强く、或は占城を滅して、之を廣南、順化、占城

の三州となし、或は老檛を伐つて、其の大半を占領せしが、明の世宗の時に至りて、莫登庸なる者起り、帝位を簒奪して、黎氏を老檛に逐ひ、尋で世宗の來伐を恐れて、帝號を去り、明に内附して、安南都統使となり、子孫相承けて黎氏の大敵となれり。

第一地圖參照

暹羅の沿革

第七節　暹羅は、古へ、老檛、暹及び羅斛の三國に分れ、隋の時に至りて、始めて中國に通ぜり。當時羅斛は、瞿曇氏國王たりしが、唐の初めに及びて、革命起り、國號を改めて羅越といへり。斯くて元の末世に至り、更に革命ありて、新王立ち、暹國を併せて、國號を暹羅と稱したりしが、後ち使を遣はして、明の封爵を請ふに及び、太祖は之を封じて、暹羅國王となせり。

明末に當りて、日本の朱印船は、安南、占城、東蒲塞、等に往來し、暹羅にも日本街ありて、數多の日本人之に住居せしが、中に山田長政なる者ありて、國王に登庸せられ、屢戰功を立てゝ逸比留(馬來半島に在り)侯に封ぜられ、尋で右相丞より、第二王に進みたりしが、左相丞高漢と隙を生じて、遂に其の毒殺する所となれり。

第一地圖及第十三地圖參照

緬甸の沿革

第八節　緬甸は、漢には撣國と稱し、唐には驃國と號し、宋に至りて、始めて緬國といへり。甸は即ち其の部族の名にして、分ちて大甸、小甸となせり。元の初めに至りて、世祖は使を遣はして、其の内屬を諭しゝと雖、國王敢て命を奉ぜざりしかば、世祖乃ち之れを三征して、國都を陷れ、王の降を請ふに及びて、更に封じて、緬甸王となせり。然るに後ち幾もなくして、王弟簒奪を謀りて、國内大に亂れたりしかば、元は之を定めて、宣慰使司を置き、明も亦元の舊に依りて宣慰使

司を置き、國王を以て、其の使に補せり。其の後、緬王は怒江上流の土族と戰ひて、孟養、木邦、隴川、老撾、等を平げ、遂に進んで、明の邊境を侵すに至りたりしが、尋で國内分裂して、阿瓦、阿臘干、琵牛の三國となれり。

三藩の叛

以下第十二及第十三地圖參照

第六編　清初より現時にいたる

第一章　康熙乾隆二帝の雄圖

第一節　世祖は、明を滅せし後、僅に二年にして崩じ、聖祖（一六四四―一七二三）之に嗣ぎて、大に清の國礎を堅ふせり。所謂康熙皇帝即是なり。帝の初年に於て、先づ記すべきを、三藩の叛とす。三藩とは、平西（雲南）靖南（福建）平南（廣東）の三王にして、皆嘗て清に降りて、其の封を受けし者なり。初め平南王尚可喜の、老病の故を以て、藩籍を奉還するや、平西王吳三桂及び靖南王耿精忠の二人も、之を聞きて自ら安ずる能はず、朝旨の存する所を窺はんとして、試に平南王の例に倣はんことを請ひたりしが、帝之を察せずして、其の請を納るゝに至り、吳三桂先づ反して、雲南、貴州、四川、湖南の諸省を侵畧せり。

是に於て、帝は平南及び靖南の二王を復し、直に諸將を派して、三桂を討たしめしと雖、耿精忠も、尋で叛きて、福建、廣西の二省を畧し、陝西の提督王輔臣は其の任地を以て、賊軍に應じ、臺灣の鄭經は精忠の請によりて、福建に現はれ、尚可喜の子之信は、廣東を以て、三桂に通ぜり。然れども、是より賊勢漸く衰へて、官軍頻りに其の侵地を恢復し、輔臣、精忠、之信

臺灣の平定

外蒙古の平定

の三人は皆降を請ひ、三桂は病みて永興に卒せり。是に於て賊は三桂の孫世璠を迎立せしと雖、官軍之を滇城(雲南)に圍みて、遂に自殺せしめたり。時に西紀千六百十一年なり。

第二節　臺灣は嘗て鄭成功の、魯王を奉ぜし所なり。王と成功とは、共に幾もなくして死せしと雖、成功の子經、尚ほ之を保有して、清に降らず、殊に三藩の亂起るに及びては、其の將劉國軒と共に福建、廣東、二省の沿岸を侵略せしかば、帝は先づ諸將を遣はして、之を擊退せしめ、尋で水師提督施琅をして、水師二萬を以て、臺灣に向はしめたり。時に經は既に死して、子克塽之に嗣ぎたりしが、衆寡敵す可らざるを知りて、國軒と共に軍門に降れり。是に於て、臺灣は全く清の治下に歸せり。時に西紀千六百八十三年なり。

第三節　帝は三藩の叛を平げて、臺灣を降すに至り、先づ露國と交渉を開きて、其の南侵を拒ぎ(後章に明なり)、更に力を西北に注ぎて、外蒙古及び西藏を略定せり。

外蒙古は、素と元の後裔土謝圖汗の領有にして、土謝圖汗は、其の族車臣汗及札薩克圖汗と共に、之を分治せしが、厄魯特の準噶爾部(伊犂)より噶爾丹なる者起り、青海及び回部を併せて、遂に外蒙古に侵入するに及び、三汗は走りて清に投ぜり。

噶爾丹は、啻に外蒙古を奪略せしのみならず、三汗を逐ふを名として、來りて內蒙古を侵しゝかば、帝乃ち親征して、大に其兵を昭莫多に破れり。時に噶爾丹は、外征日久しくして、舊土伊犂は姪策妄拉布坦に併せられ、回部及青海も、亦皆離畔して、殆ど身を寄するに所なかりしかば、清兵の重ねて之を追窮するに至り、自から毒を仰ぎて死せり。是に於て、

阿爾泰山以東は、悉く清の版圖に入れり。時に西紀千六百九十七年なり。

西藏の平定

第四節　其後策妄拉布坦は、自から準噶爾汗と稱して、厄魯特の全部(合せて四部あり)を併せ、兵を遣はして、西藏の拉藏汗を襲殺せしかば、帝は傅爾丹、噶爾弼等の諸將を派して、東北二面より、同時に西藏に向はしめ、悉く厄魯特の兵を掃ひて、達賴喇嘛を封じ、且つ拉藏汗の舊臣二人を擧げて、前藏、後藏を分治せしめたり。(西紀千七百二十年)。

準噶爾の平定

第五節　斯くて、清の國威は、東南二方より、漸く準噶爾に迫りしにも係らず、準噶爾汗は尙ほ之に屈せず世宗(一七二三——一七三六)の初年には、青海の主(清に叛きて逐はれし者なり)を擁護して、清廷の感情を害し、殊に策妄拉布坦死して、其の子策零の嗣ぐに至り益狡黠にして、屢邊境に來寇せしかば、世宗乃ち意を決して、征討の師を出せり。然れども、當時は準噶爾の兵猶ほ極めて强盛にして、清軍多くは敗退し、交戰前後六年に至るも、尙ほ之を降すこと能はざりしが、高宗乾隆帝(一七三六——一七九六)の立つに及び、始めて宿望を達することを得たり。

時に策零既に死して達瓦齊汗位にありしが、其の族阿睦撒納之と合はずして、來りて準噶爾の取るべき狀を奏せしかば、帝は之を機として班第、永常の二將を遣はせり。二將乃ち東南兩路より、直に之に擊入せしかば、達瓦齊は敗走して、烏什に到り、其の主霍吉斯に捕へられ、遂に清軍に交附せられたり。是に於て、準噶爾は、一旦平定せしと雖、阿睦撒納尋で叛きて、之を奪ひ、駐防の清兵を破りて、將軍班第を殺し、かば、帝は重ねて兵を出して、之を討滅せしめたり。時に

回部の平定

西紀千七百五十七年なり。

第六節　喀什噶爾汗の子博羅尼都及び霍集占の二人は、嘗て清軍に救はれて、其舊都を恢復するとを得しと雖も、阿睦撒納の事を擧ぐるに當りて、霍集占は伊犂に在りて、之に通じ、既にして其の敗死するに及び、國に歸りて、兄博羅尼都と共に、反旗を飜せり。是に於て、帝は兆惠を遣はして、之を伐たしめたり。兆惠乃ち阿克蘇の副將當德と共に、進みて、大に兄弟二人を擊破せしかば、二人は西奔して、遂に土族の爲に擒殺せられたり。時に西紀千七百六十二年なり。

第十一地圖を參照

是に於て、清の威命は、葱嶺以西に振ひ、布魯特、哈薩克、阿富汗、浩罕、巴達克山、等の諸族、皆使を遣はして、朝貢するに至れり。

緬甸及安南の二役

第七節　帝は、西北諸國を平定するに及びて、更に力を南方に轉じ、緬甸を屈し、金川を征し、臺灣を平げ、安南を伐てり。今左に緬甸及安南の二役を略述せん。

緬甸は、夙に欵を清に送りたりしが、雍籍牙の、王位を簒奪するに及びて、屢邊境に侵入せしかば、帝は先づ明瑞を遣はして、之を伐たしめ、明瑞戰死するに至りて、更に傅恒を遣して、大に敵兵を金沙江上に破らしめたり。

安南は、此頃大越王黎維祁の治世なりしが、阮惠なる者起りて、之を廢して、自ら東京王と稱するに至り、維祁使を遣はして、援を清に請ひしかば、帝は孫士毅等を遣はし、阮惠を討ちて、維祁を復位せしめたり。但し其後、阮惠は再び起りて、東京王と稱し、清兵の再擊を恐れて遂に其封を請へり。

第二章　乾隆以後の清朝

内亂の蜂起

第一節　若し過去の歴史に由りて、之を概言すれば、清朝の勢威は、乾隆帝の時に至りて、全く其の極に達し、以後は漸く萎微して、歴世唯祖業を退守するに過ぎずといふべし。乾隆の末年より、白蓮教徒中、不軌を謀りて、追捕せられし者ありたりしが、仁宗の初年に至りて、其の徒再び湖北に起り、遂に河南、四川、陝西、甘肅等の諸省を攪亂し、騒擾七年の久しきに亘れり。

其の後、南山には新兵の暴動あり、閩、粤、臺灣の地方には、海賊蔡牽及朱濆の寇あり、仁宗(一七九六——一八二一)の末年より宣宗(一八二一——一八五一)の初年にかけては、更に回部の大亂起れり。初め博羅尼都の孫張格爾、清兵の捕獲を免れ

鴉片戰爭

走りて浩罕に在り、回部の教徒と通じて、屢邊に入寇せしが、宣宗の世に至りて布魯特及び浩罕の酋長と共に、大擧して喀什噶爾に迫り、將軍慶祥を逐ひて、葉爾羌、和闐等を取れり。是に於て、宣宗は、陝甘の總督楊遇春を遣はして、之を擊攘せしめしかば、張格爾は踰年にして、生擒せられしと雖、浩罕は尚ほ數年の間敵意を挾めり。

第二節　英人は、明の頃より、既に支那に通じ、清に至りては、其の貿易益盛にして、頻りに印度より鴉片を輸入せしかば、宣宗は林則徐を廣東總督に任じて、之が防禦を計らしめたり。則徐乃ち廣東に到りて、英商に嚴談し、悉く其の所有せる鴉片を出さしめて、之を燒却し、且つ令を發して堅く英人の通商を斷てり。

是に於て、英人は軍艦を派遣して、通商を復せんことを求

め、則徐之に應ぜざるに及んで、廣東、香港、舟山、寧波、等を攻撃して、直に和議を北京政府に通ぜり。宣宗仍て則徐を斥け、全權大臣を廣東に遣はして和を議せしめしと雖、英人竊に浙江及び廣東を侵すに及びて、和遂に成らざりしかば、帝は再び則徐を起用し、皇弟綿瑋・親王を遣はして、廣東を恢復せしめたり。

然れども、英兵尋で大に到り、厦門を取り、定海を略し、勢に乘じて、鎭海、吳淞、鎭江、等を陷れしかば、帝は止むなく伊里布、耆英の二人を南京に遣はして、英將と和を議せしめ、償金二千六百萬兩を出し、香港を英國に割讓し、且つ廣州・福州・寧波・厦門・上海の五港を開きて、互市場となせり。

第三節　鴉片の戰後、粤西は凶歲打續きて、盜賊各地に蜂起せしが、宣宗の末年に至りて、廣西の桂平縣より、洪秀全と

長髮賊の亂

いへる者起り、天主教を利用して、愚民を誘導し、兵威漸く振ふに及びて、自ら大平天國王と稱し、馮雲山、楊秀清、韋昌輝、等の諸將を率ゐて、岳州、漢陽、安慶、金陵、等を陷れ、遂に府を金陵に開きて、持久の計をなせり。

時に宣宗既に崩して、文宗(一八五一——一八六二)位に在り、林則徐、賽尙阿、等の諸將を派出して、之を討たしめしと雖、一人として、能く功を奏する者なく、獨り曾國藩は湘鄉に在りて、鄉勇を募り、堅く湖南を保持して、武昌、漢陽、九江、等を復したりしが、楊秀清尋で之を降して、賊軍再び猖獗を極め、江岸の諸州は云ふに及ばず、安徽、河南より、山西、直隸の諸省に至る迄、皆其の難を被らざるはなきに至れり。

既にして、賊軍中に內訌起り、秀全其の將秀清及び昌輝を殺したりしかば、胡林翼之に乘じて、國藩と力を合せ、再び漢

陽、武昌を復し、楊州、鎭江も亦久しからずして、官軍の手中に歸せり。然れども賊將陳玉成及ひ石達開の二人は、尙ほ强盛にして頻りに官軍を破り、秀全も金陵の官兵を退けて、師を上海に出しゝかば、上海の官民大に驚きて、外國の兵を借らんことを、北京に申請せり。

此時、文宗偶崩じて、穆宗(一八六二——一八七五)位に上り、直に其の請を納れて、援を外人に求めしかば、英、米、佛の三國人、相協議して、之を援け、殊に米人華爾特及び英人戈登の二人は、共に全力を奮ひて、常勝軍に將たりしより、官軍益勢を得て、曾國藩、李鴻章、曾國筌等も皆屢勝を奏し、玉成、達開の二人は、共に生擒せられ、秀全は自ら毒死して、十六年來の大亂、茲に始めて平定せり。時に西紀千八百六十四年なり。

穆宗乃ち功を賞して、曾國藩に侯爵を授け、曾國筌及び李鴻章に伯爵を與へたり。

英佛同盟軍の來寇

第四節　是より先、長髮賊の盛なりし時に當りて、英人は廣東の府吏と葛藤を生じたりしが、英國の領事　パークス　は之に乘じて、佛、露、米の三國を誘ひ、先づ武力を以て、廣東を略し、更に天津に進みて、清廷をして、新に通商條約を訂結せしめたり(西紀千八百五十八年)。

其の翌年に至り、英、佛二國の使臣、各批準條約交換の爲に、艦を同ふして北京に向ひ、將に白河に入らんとするに及んで、河口の砲臺より砲擊せられしかば、英、佛二國は、直に同盟軍を作りて、直隸灣を衝き、北塘及び太沽を陷れて、天津に進み、清廷の和議を排し、親王僧格林泌の兵を破りて、遂に北京に入れり。

時に文宗は既に逃れて、熱河に在り、恭親王を遣して、頻り

臺灣の紛議

に和議を求めしめ、露國公使亦其間に入りて、調停に奔走せしかば、同盟軍は償金千八百萬兩を取り、且つ牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口、等の諸港を開かしむるの約をなして退けり(西紀千八百六十一年)。

第五節　初め、日本沖繩の藩民、臺灣に漂着して、生蕃の爲に虐殺せられ、尋で備中の人民も、亦其の禍害を被りしかば、日本は先づ副島種臣を北京に派して、之を問はしめしに、清廷は、口頭を以て其の化外の地なることをいへり。是に於て、日本は西鄕從道をして、問罪の師を率ゐて、臺灣の生蕃を平定せしめたりしが、清廷は之に驚きて、急に異議を唱へ、速に其兵を撤せんことを、日本に要求せり。

然れども、日本は清廷の前言に違へるを責めて、敢て之に應せず、尋で大久保利通を遣はして、生蕃の所屬を論難せしめしかば、清廷遂に償金五十萬兩を出して、臺灣の撤兵を請へり。時に西紀千八百七十五年にして、我明治八年に當れり。

光緒帝の外國交渉

第六節　穆宗は、此年を以て崩じ、醇親王の子載湉之に代りて、天位に即けり。今上光緒皇帝即ち是なり。帝の外國交渉中、重大なる者三事件あり。第一は、伊犂事件にして、露國と衝突し、第二は安南事件にして、佛國と衝突し、第三は朝鮮事件にして、日本と衝突せり。伊犂事件に於ては、帝は殆ど滿足なる結果を收め、僅に償金九百萬ルーブルを出して、悉く霍爾果斯河東の地を收得することを得しと雖、安南及び朝鮮の二事件に於ては、不幸にして全く失敗を取れり。殊に朝鮮事件に於ては、啻に其の主權を放棄せしのみならず、地を割き、港を開き、且つ、巨額の償金を出して、漸く其の局

を結べり。其の詳細なる事實に至りては、請ふ之を後章に說かん。

第三章　清朝の文化

第一節　官制

官制は、內閣を以て、政府の中心となし、內閣大學士、及び協辨大學士を置きて、之を組織し、其の下に、六部(吏、戶、禮、兵、刑、工)の衙門を設けて、萬政を分掌せしめ、別に軍機所を設けて、軍國の大事を議せしめ、總理衙門を設けて、外交の事を掌らしめ、理藩院を置きて、藩政を總轄せしめ、都察院を置きて、警察を總掌せしめたり。又外官には、總督、巡撫、布政使、按察使、等の諸官を置き、皆出でゝ地方の政務に當らしめたり。

兵制は天下の兵を分ちて、陸軍及水師となし、更に陸軍を分ちて、八旗、綠旗、鄉勇の三兵となせり。八旗とは、黃、白、紅、藍の四色に、各正鑲を附せし者にして、清初より滿、漢、蒙の三人種を以て、之を編成し、或は宮城を護衛せしめ、或は地方に屯駐せしめたり。綠旗兵は、專ら漢人より成れる者にして、全く各省の駐防に供せり。鄉勇は、地方に招募せし壯丁にして、世襲の兵にあらずと雖、長髮賊の亂ありし後は、各省皆之を置くに至れり。又水師は、分つて北洋、南洋、長江、福建、廣東の五水師となしゝと雖、其の最も强盛なる北洋水師は、日清戰爭の爲に全滅して、今は再修の計畫中なり。

次ぎに、稅法には、地賦、丁賦、雜賦の三種あり。地賦は夏稅、秋糧といひて、每年二期に之を徵收し、丁賦は、成丁、未成丁、富戶、貧戶等の別を立てゝ、之を課し、雜賦は分つて營業稅、釐金稅(貨物運輸の稅)、海關稅、內地關稅等の數種となせり。

學術

第二節　清朝の學術に於て、先づ注意すべきは、考證學の發達是なり。考證學は、既に明末より起りて、顧炎武の如きは、其の曉星ともいふべき學者なりしが、康熙、乾隆の二帝出でゝ、大に學術を振興し、殊に勅撰の大著述をなして、專ら經史の研究を勵したりしかば、考證學は益進みて、閻若璩、毛奇齡、惠棟、戴震、等の諸大家を輩出せしむるに至れり。

文學も、之と共に大に興りて、數多の大家を出せり。今其の一二を擧ぐれば、吳偉業、王士禎、蔣士銓等は、詩賦を能くし、魏禧、侯方域、朱彝尊、等は、文章を能くし、金聖嘆、李漁、孔東塘、等は、戲曲小說を以て千載不滅の名を得たり。

宗教

第三節　佛教は、元、明以後、諸派悉く衰へて、喇嘛教獨り盛なりしが、清朝に至りても、喇嘛教は敢て衰廢せずして、西藏、蒙古地方の人民は、皆其の黃教を信ぜり。道教は、明に於て大に勢力ありしを以て、清に至りても、其の術を修むる者、決して少からず、政府は各地に道官を置きて、之を統督せしめたり。

基督教は、元明以來、流傳日厚きを以て、其の布教は漸く各地に行はれ、今は全國到る處の市邑に、教會の設けあるに至れり。回教は、元の時より盛に支那の西部に流行せしが、清に至りても、天山南路は依然として其の中心となり、嘗て高宗及び宣宗の征討を受けしにも係らず、益東流して、甘肅、陝西、直隸の諸省に及べり。

第四章　英領印度の興起

葡人の渡來

第一節　印度は夙に歐洲人の涎を垂れし豐土にして、之が通商の便路を發見せんと欲せし者、其の數少なからざり

第一地圖參照

蘭人の勢威

しが、西紀千四百九十八年に至りて、バスコ、デ、ガマ といへる者、葡萄牙王の命を奉じて、始めて弗南一周の新航路を開き、印度の南端なる カリクート に上陸して、其地の牧長と通商の約を結べり。

是より葡人は、續々來りて、印度の西岸、及び東印度諸島中に貿易を開き、且つ頻りに領土を作りて、植民の用に供せり。而して葡國政府は、葡領印度太守を置きて、之を統轄せしめしかば、其の勢威益盛にして、ゴア、錫蘭、マラッカ、オルムス、等の諸要地は皆其の手中に歸するに至れり。

第二節 和蘭人の、始めて印度と通商を開きしは、十六世紀の末年にして、葡人に後れしこと、殆と一世紀なりしと雖、其商人は極めて機敏にして、漸く葡人の商權を奪へり。殊に蘭政府は、當時新に西班牙と分立して、盛に海上の權を競ひ、和蘭東印度商社を立てゝ、東洋貿易を奬勵したりしかば、其の勢彌振ひて、遂に葡人の領土を奪略し、（マラッカ、錫蘭等）、カルカッタ、ラジア、ベロール、バタビア 等に市廛を開きて、一時は東洋貿易の全權を掌握し、其餘響は引いて我日本に及べり。

英人の起業

第三節 英人は、西紀千五百九十一年を以て、始めて印度の各地と通商の約を結び、蘭人に倣ひて、東印度商社を設け、先つ葡人と戰ひて之を破り、尋で蘭人と戰端を開きて、初めは常に失敗せしと雖、後ち漸く勢を得て、蘭領の要地を奪ひ、遂に全く和蘭東印度商社を仆して、更に佛人と爭端を開けり。當時英人の領有は、大陸にては、ボムベイ、マドラス、等の數市あるに過ぎざりしが、其の廛舍は遠く瓜哇、スマトラ、暹羅等の各地に建設せられたり。

佛人の跋扈

第四節　佛蘭西人も、英人に次ぎて、印度と通商を開き、西紀千六百七十四年には、佛蘭西東印度商社を、ポンデシェリー に立てゝ、頻りに英人と商權を爭ひたりしが、ザウブレー 其の總督に任ぜらるゝに及びて、始めて印度蠶食の雄圖を懷き、偶、莫臥兒帝國分裂して、諸侯互に攻伐を事とするに乘じ、一を滅して一を懷くるの策を用ひて、ポンデシェリー 附近の數國を定め、佛人の勢威日に振ひて、ザウブレー の威名は印度諸侯の心膽を奪ふに至れり。

クライブの偉業

第五節　此時に當り、クライブ は、東印度商社の書記として、マドラス にあり、ザウブレー の陰謀を察して、其の反對に出で、佛人と通ぜるカーナチック 侯を討滅して、アーコット 侯の急を救ひ、全く佛人の勢力を殺ぎて、英人の威力を印度の全地に確立せり。

印度諸侯の覆滅

斯くて西紀千七百五十六年に至り、ベンゴル の土侯スラッヂ、アッドーラ 故ありて英の カルカッタ の貿易場を蹂躙せしかば、クライブ は、陸軍總督となりて之に向ひ、大に其兵を プラッセー に破りて(翌年) ベンゴル の稅政、及び民政を奪へり。是に於て、クライブ は、東印度商社より其總督に任ぜられ、更に兵を出して、佛の領有を略し、且つ蘭軍の土侯を援けし者を破れり。

第六節　後ち、クライブ の、健康を破りて、英國に還るに及び、ベンゴル、オウド の二侯は、共に聯合して、莫臥兒帝の兵を戮せ、英人と バサール に戰ひて、遂に大敗を取れり。是に於て ヘスチングス は クライブ に代はりて、印度に來り、ベンゴル を沒して、英領となし、オウド を屈して、保護國となし、莫臥兒帝には年金を與へて之を懷けたり。

斯くて、英人は、勢既に印度を呑みしにも係らず、各地の土侯は、尚ほ之に反抗して、次第に其領土を削除せられたり。即ち マイソル 侯は、十八世紀の末年を以て、領土の半を削られ、マーラッタ の諸侯は、今世紀の初年を以て英將 ウエルスレー の爲に討平せられ、シンド は、千八百四十三年に至りて敗亡し、パンヂャブ の シクス 人は、千八百四十九年に至りて征服せられ、其の他の小諸侯は、或は斷絶を以て國を除かれ、或は暴虐を以て廢滅せられたり。

土兵の亂

第七節 當時印度人は、ヒンドゥー 及び モハメッド の二教を奉じて、夙に英人の跋扈を憤慨せしが、其の新に軍銃を造りて、之を土兵に頒つに至り、藥筒の事に關して、宗教的の紛議を起し、土兵遂に叛旗を翻して、各地の英人を虐殺し、莫臥兒帝を謀主に仰ぎ、不遇の諸侯を誘導し、西は デリー より東は バトナ に至れる、一帶の地を攪亂せり。是に於て、英人は、二年の歳月と、一億五千萬弗の軍資とを費して、漸く之を平定し、莫臥兒帝國を滅し、與謀の諸侯を罰し、且つ東印度商社を廢して、印度を英國女皇の直轄となせり。

第五章　後印度諸國の運命

緬甸の滅亡

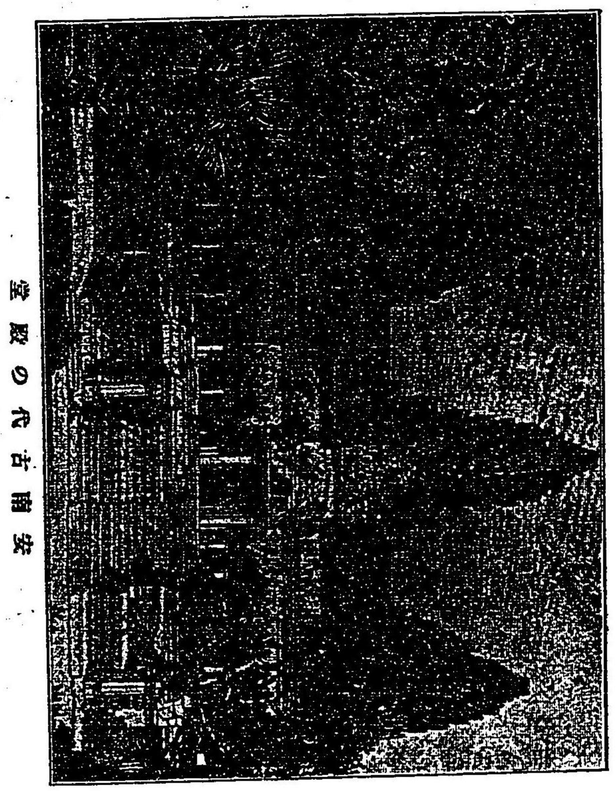
第一節 緬甸は、明末より阿瓦、琵牛、阿臘干の三國に分裂して、互に相侵伐し、清の乾隆の初年に當りては、琵牛人蘭兵を藉りて、本國阿瓦を併せたりしが、其の後阿瓦大に興りて、琵牛を服し、暹羅を滅し、且つ阿臘干を併せて、再び舊時の盛運を挽回せり。

然るに、西紀千八百二十四年に至り、英人と阿臘干の一小島を爭ひて、戰端を開き、英兵頻りに、各地に勝ちて、イラワデ

ー河を遡り、ラングーン、ブローム、等を畧して、將に國都に向はんとせしかば、國王メンダン事の爲す可らざるを知りて、和議を求め、償金百萬磅を出し、阿臘干、メルグイ、タボイ、等を割讓せり。

斯くて緬甸は痛く衰弱せしにも係らず、國王尚ほ英人を蔑視して、通商條約に背きしかば、英艦再びイラワデー河を遡りて、ブローム を陷れ、王は止むなく、琵牛、マルタバン等の地を割きて、之と和を結べり。時に西紀千八百五十二年なり。

既にして、王崩じて新王チーボー立ち、暴戾、昏愚にして、復た英人と兵を交へ、吉夢を信じ、佛法を賴みて、日に捷後の計畫に餘念なかりしかば、英人は直に軍を進めて、マンダレーを陷れ、王を生擒して、ボムベイに送り、緬甸を擧げて、

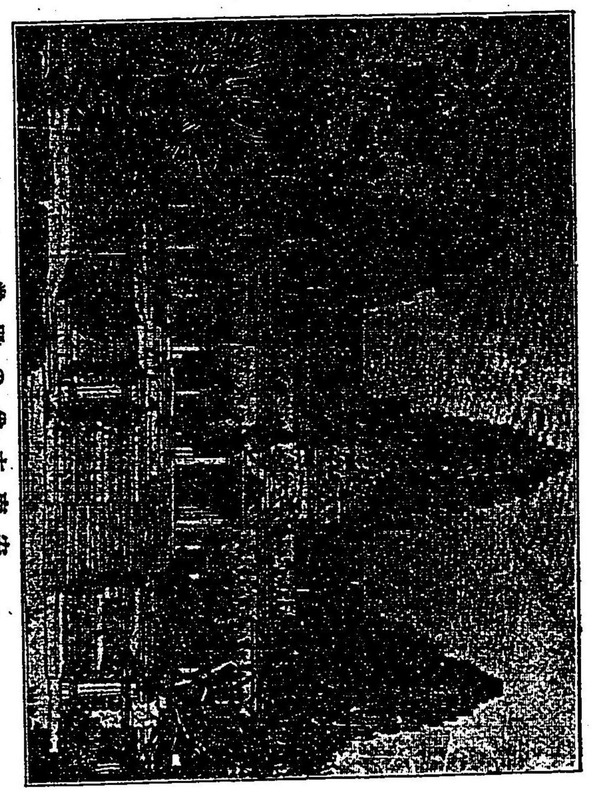


安南の古都

ー河を遡り、ラングーン、プローム、等を畧して、將に國都に向はんとせしかば、國王メンダン事の爲す可らざるを知りて、和議を求め、償金百萬磅を出し、阿臘干、メルグイ、タボイ、等を割讓せり。

斯くて緬甸は痛く衰弱せしにも係らず、國王尙ほ英人を蔑視して、通商條約に背きしかば、英艦再びイラワデー河を遡りて、プローム を陷れ、王は止むなく、琵牛、マルタバン等の地を割きて、之と和を結べり。時に西紀千八百五十二年なり。

既にして、王崩じて新王チーボー立ち、暴戾、昏愚にして、復た英人と兵を交へ、吉夢を信じ、佛法を賴みて、日に捷後の計畫に餘念なかりしかば、英人は直に軍を進めて、マンダレー を陷れ、王を生擒して、ボムベイに送り、緬甸を擧げて、



安南古都の宮殿

英領印度の一部となせり。時に西紀千八百八十五年にして、我明治十八年なり。

第二節 清の乾隆年間に當りて、暹羅は阿瓦の爲に全く討滅せられたりしが、鄭昭なる者起りて、敵兵を退け、自ら王位に上りて、都を盤谷に定めたり。弟華之に嗣ぎて、清に入貢し、乾隆帝の封を受けて、暹羅國王となれり。

其の後、暹羅は東蒲塞の事に關して、屢安南と兵を交へ、遂に老撾及び東蒲塞の一部を得て、之と名譽の和を約し、西紀千八百五十三年以後は、專ら開國の方針を執りて、英、佛、米、清の諸國と通商の約を結べり。而して、今王（キウラロンゲルン）は、即位以來益治を圖りて歐米の文化を求め、我明治二十年には、我邦とも修交の約をなせり。

第三節 明末に當りて、廣南に阮氏起り、廣南王と稱して、

暹羅の新興

安南の統一

都を順化府に定め、子孫相承けて、占城及び東蒲塞を攻略せしが、清の乾隆の頃に至りて、西山州より阮文岳といへる者起り、順化府を陷れて、自ら交趾王と稱し、更に其の將文惠をして、越を擊たしめたり。

是より先き、越は清に朝して、安南國王に封ぜられしと雖、內政既に亂れて、國力微弱なりしかば、文惠は直に東京に入りて、攝政となり、尋で王位を奪ひて、自ら東京王といへり。是に於て、黎氏は使を清に遣はして、其援を求めしかば、乾隆帝乃ち之に應じて、一旦黎氏を復せしと雖、文惠は遂に清兵を退けて、再び東京王と稱し、後ち清に內附して、其の封を請へり。

此時、廣南の阮福映は、佛國の宣教師に援けられて、暹羅に逃れ、使を佛國に遣はして、其の兵を藉り、漸く交趾を定めて、

佛人の來侵

國都を柴棍に立て、後ち東京王死して、國內大に亂るゝに及び、先づ中交趾及び上交趾を取りて、順化の故都に還り、更に北伐の師を出して、東京を陷れ、國號を越南と改めて、中興の事を清に奏し、乾隆帝の封を受けて、越南國王となれり。是れ即ち、嘉隆帝にして、實に今王の八世の祖なり。

第四節　初め阮氏は佛國に援助を請ふに當り、事若し成らば、化南島を割讓せんことを約したりしが、後ち安南を一統するに及びて、其の盟約を履行せず、且つ世々天主教を惡みて、佛國の宣教師を虐殺せしかば、西紀千八百四十七年以來、佛國は之に臨むに、武斷を以てせり。

斯くて、千八百五十八年に至り、佛國は、東京に黎興の亂あるに乘じて、化南港を破り、柴棍府を略取せり。是に於て、嗣德帝は止むなく、邊和、定祥、嘉定の三州を割きて、和を求め、佛

國は之を受けて、根據地となし、更に東蒲塞を定めて、其の保護國となせり。是より先き、東蒲塞の南半は、既に安南に併せられしが、北半の山地は、尚ほ一王國として、其の附庸たりしを以てなり。

其の後、越は紅河航通の事に關して、再び佛人と兵を交へ、佛軍幸に敗退して、越は僅に其の通商を開きしに過ぎざりしが、既にして東京の知事黄宗英の、劉永福(黑旗兵の首領)を引きて、佛人を擊退せんとするに至り、佛國は直に兵を進めて、河内及び南定を攻陷せしめたり。斯くて、崇英は遂に自殺せしと雖、永福は其勢尚ほ盛にして、來つて河内を復せしかば、佛の東京理事官は、越の政府を以て、黑旗兵の根據となし、少將 クールベー を遣はして、京城を侵さしめ、協和帝の和を請ふに及びて、越を擧げて、佛國の保護國となせり。時に西紀千八百八十三年なり。

清佛の衝突

第五節　然るに、清國は、越を以て其の藩邦となし、曾紀澤を佛國に派して、頻りに異議を唱へしめしと雖、總理 フェリー 固く執つて、敢て動かざりしかば、清廷遂に之に屈して、佛國の主權を認許せり。是に於て、佛軍は進んで、諒山の鎭臺を占有せんとせしが、清國の守兵突然之を襲擊せしかば、佛國は海陸二軍を發して、清國に向はしめ、海軍は クールベー 之が主將となりて、福州の清艦を沈滅し、陸軍は チグー 之を率ゐて、鎭南關内に擊入せり。

然れども、此時偶 フェリー 内閣仆れて、佛國の外政一變し、清將馮子材之に乘じて、諒山を恢復せしかば、兩國互に一歩を讓りて、和を天津に結び、越の主權は依然として佛國に歸せり。時に西紀千八百八十五年にして、我明治十八年なり。

第六章　西亞の大勢

サファビー朝の興起

第十一地圖參照

阿富汗朝の興亡

第一節　帖木兒の、アム　河邊に沒して、邦土忽ち瓦解するや、月祖伯人(金黨の別種)は、之に乘じて、中亞細亞の各地を奪ひ、都爾格人は再び東侵して、シリヤ　及び　メソポタミヤに及びたりしが、十五世紀の末年に當りて、イスマエル　なる者波斯に起り、所謂　サファビー　朝を建てゝ、四境を經營し、西は都爾格帝　ムラッド　の軍を破り、東は月祖伯人の主　シャイバニ　の兵を破れり。而して、孫　アバス　大王の立つに至りては(西紀千五百八十六年)、啻に兵を東西に用ゐしのみならず、英吉利、露西亞、西班牙、葡萄牙、佛蘭西、印度等の諸國と相往來して、頻りに文化の輸入を圖れり。

第二節　然るに、十八世紀の初年に至りて、阿富汗斯坦に

ナヂル、シャーの勢威

マームード　王起り、性驍勇にして、攻伐を好み、西紀千七百二十一年を以て、波斯に侵入し、遂に　サファビー　朝を滅して、自ら波斯王(シャー)　となれり。マームード　は尋で死して、其の子　アシラフ　位を嗣ぎしが、内は暴政甚しくして、下民之に服せず、外は露都二國の來寇ありて、國力痛く衰耗したりしかば、幾もなくして、有名なる　ナヂル、シャー　の爲に擊退せられたり。

第三節　ナヂル、シャー　は、千七百三十六年を以て、シャー位に即き、西は都爾格人を逐ひて、アルメニア　及び　ジョルジア　を復し、東は莫臥兒帝國を略して、パンジャブ　に至り、北は月祖伯人を破りて、アム　河を境とし、南は　キルマン　及び　メクラン　の全地を併せて、直に亞剌比亞海に接し、コラサン　以東の地を割きて、其の將　アブダリー　に與へたり。

カヂャー朝以後の西亞

アブダリー は即ち阿富汗斯坦の アーメッド、シャー にして嘗て印度を蠶食して、カシミル、パンジャブ、シンド、等に及びし人なり。

第四節 波斯、阿富汗斯坦の二國は、一時は斯くの如く強盛なりしと雖、共に一代にして、衰廢に傾き、波斯は、カヂャー人の主 アガ、ムハメッド の爲に滅され、阿富汗斯坦は、其の臣ドスト、モハメッド の爲に簒奪せられたり。而して アガ、ムハメッド は、西紀千七百九十六年を以て カヂャー 朝(波斯現時の王朝)を建てしと雖、都爾格人は、東侵して、チグリス 河東に至り、露西亞人は、南侵して アラス 河に及び、カブール、カンダハル、ヘラット の三地は、尚ほ依然として阿富汗斯坦に歸せり。又中亞細亞の地は、初めは月祖伯人に屬して、基華、卜哈剌、浩罕(ブハラ、カン)の三汗稍盛なりしが、後ち露國の南侵するに及んで、或は亡び、或は藩となれり。

露國南侵の三路

第五節 露國の對外策は、嘗て ピーター大帝の定めし所にして、其の侵略は、常に河海に向ひて進めり。蓋し大帝は、當時に在りて、既に世界の大勢を觀破し、列國の競爭は最早陸上にあらずして、寧ろ水上に在るべきことを知りたればなり。

露國の南侵は、最も能く其の政策を證明せる者にして、自ら三大進路に分れたり。即ち第一は黑海を經て地中海に出でんと欲せし者にして、事全く都爾格に關し、第二は、高加索地方より進んで、裏海の全權を收めんと欲せし者にして、事重に波斯に關し、第三は、シル、アム の二河谷を獲て、遂に印度に進まんと欲せし者にして、其の影響は、中亞諸國、英領印度、阿富汗斯坦、波斯、等に及べり。但し第一路の侵略は、

高加索地方の侵略

全く西洋史に屬するを以て、今は之を除きて、第二第三兩路の侵略を概言せん。

第六節　高加索地方の經營は、實に ピーター大帝を以て始まれり。帝は、波斯人の露商を害せしを機として、大兵を波斯に出し、マームード　王の兵を破りて、悉く裏海の沿岸（ダゲスタン、ギラン、マザンデラン　等）を略取せり。時に西紀千七百廿五年なり。然るに ナヂル、シャー　出でゝ、忽ち之を恢復したりしかば、アガ、マームード　の世に至りて、カザリン　女帝は再征の師を出し、デルベンド、バクー、等を攻陷して、將に ギラン　に及ばんとせしが、偶帝崩じて事全く水泡に歸せり。

然れども、露國の南侵は、之が爲に挫折せず、アレキサンダー一世の立つに至りて、波斯と ジョルジア　を爭ひて、大勝を

中亞細亞地方の侵略

收め、啻に ジョルジア　を得しのみならず、併せて傍近の七州を得たり。時に西紀千八百十四年なり。後ち十餘年を經て、ニコラス一世は、更に波斯と戰ひて、アラス　河以北の地を收め、アレキサンダー二世は、尋で北高加索の土族を鎮定して、治を其の地に布き、且つ都爾格と戰ひて、黑海の沿岸に數州を得たり。

第七節　中亞細亞地方の經營も、亦 ピーター　大帝の頃より始まりしと雖、其の着々として、歩武を進めしは、ニコラス一世以後の事なり。帝は、キルギス人を服して、裏海以東の植民を奬勵し、且つ既收の諸要地に、城砦を築きて、征戰の計を整へしに過ぎざりしが、アレキサンダー二世の立つに及びて、先づ兵を出して、シル　河谷を南侵せしめ、西紀千八百六十三年には、浩罕（コカン）を滅し、其の翌年には、タシケンド

第一阿富汗戰爭

を略し、千八百六十六年には、サマルカンド を取りて、ト哈ヘ剌を屬國となし、千八百七十年には、カシガル 汗を誘はんが爲に、伊黎を占領せり。

而して、帝は此時既に兵を裏海の東岸に用ゐて、クラスノボドスク を略し、千八百七十三年には、基華を伐ちて、之を降し、千八百八十年には、更に南侵して、アスカバット に至れり。斯くて、帝は、此年を以て崩ぜしと雖、アレキサンダー三世之に嗣ぎて、亦意を中亞に用ゐ、遂に メルブ を取りて、東西二路の連絡を全ふせり。時に千八百八十四年なり。

第八節　初め露國の南侵、未だ斯くの如く迫らざりし時に當り、英人は早く印度の急を察して、措くこと能はず、頻りに阿富汗人を引きて、其の進路を斷たんことを圖れり。然るに、當時 カブール には、內訌ありて、ドスト、モハメッド なる者王位を奪ひ、シャー、スーザ は爲に國を脫して、印度の英人に來投せしかば、印度大總督 オークランド 之を擁して、ドスト、モハメッド の親交を退け、其の止むなくして、遂に露國と通ずるに至り、所謂義兵を出して、シャー、スーザ を復位せしめ、ドスト、モハメッド を捕へて、カルカッタ に送れり。時に西紀千八百三十八年なり。

斯くて、シャー、スーザ は、カブール の王位に復せしと雖、國人尙ほ ドスト、モハメッド を思ふて、敢て之に心服せず、千八百四十一年には、ドスト、モハメッド の子 アクバー を奉じて、大亂を作し、英國の駐在兵を退けて、之を ヤラバット の險に要擊し、且つ約に背きて シャー、スージャ を弑せり。是に於て英國政府は オークランド を免じて、エレンボロー を印度大總督に任じ カブール の亂を定めて、ドスト、モハ

第二阿富汗戰爭

メッド を復位せしめ、之と攻守同盟を結びて、波斯人の侵入に當れり。

第九節 ドスト、モハメッド は尋で死して、其の子 シーア、アリー 之に嗣ぎたりしが、英人の ケッタ を取るに及びて、英を去りて、露に通じ、印度大總督 ロード、リットン の修好を拒みて、其の使を國境より逐ひしかば、英國は再び カブール に開戰して、シーア、アリー を中亞に逐ひ、其の子 ヤクブ を立てゝ、一旦師を班せり。時に西紀千八百七十九年なり。然るに、後ち僅に二月にして、ヤクブ も亦反きて英國公使を殺したりしかば、リットン は將軍 ロバート を遣はして之を定めしめ アブダル、ラマン を立てゝ、阿富汗斯坦全國の主となせり。是れ即ち現時の國王なり。

當時 グラッドストーン は、ディスレーリー に代はりて、英國の内閣を組織したりしかば、英國は從來の政策を一變して、露國と協議を開き、阿富汗斯坦の北境を確定して、兩國の爭根を斷てり。時に西紀千八百八十五年にして、我明治十八年に當れり。

哥薩克人の東侵

第十三地圖參照

第七章　清露の衝突

第一節 悉伯利は、嘗て丁零、黠戛斯、等の住みし處にして、明代よりは、露の金黨の支族之に據りて、悉伯理汗と號したりしが、十六世紀の下半紀に至りて、哥薩克人の爲に討滅せられたり。當時哥薩克人に エルマーク といへる者あり、露人に攻擊せられて居所なきに苦み、其の徒八百人を率ゐて、烏拉爾山を越へ、行、諸部落を下して遂に悉伯理汗の居城に迫り、悉く其の地を奪ひて、之を露帝に獻ぜり。是れ實に

チルチンスクの條約

露國東侵の第一着手なり。後ち ヱルマーク は敵地に敗死して、其の侵地は、悉く蒙古人に恢復せられしと雖、露廷は哥薩克人を用ゐて、再び之を侵略せしめ、十七世紀の終には、其の足跡、既に東は オコック 海岸に至り、北は北氷洋岸に達せり。

第二節 十七世紀の中頃には、ボヤルコフ 及び ハバロフ の二人出でゝ、悉伯利の東南部を經營せり。即ち ボヤルコフ は、スタノボイ 山脉を越へて、ゼナ 河を下り、河口より黑龍江を探撿して、オコック 海に至りて還り、ハバロフ は、シルカ 河を下りて、黑龍江に出で、江岸の土族を拂ひて、烏蘇里江邊に至り、乃ち還りて、城を アルバヂン に築けり。時に清は、世祖の世にして、未だ力を外に分つこと能はざりしが、既にして康熙帝の立つに至り、哥薩克人の

清國の讓歩

南侵益甚しかりしかば、帝は愛琿城を築きて、之に備へ、且つ使を露廷に遣はして、哥薩克人の南下を止めしめたり。

然るに、アルバヂン の露人は、尚ほ依然として、其の城を保持したりしかば、帝は兵を出して、之を拔き、主將 トブルジン を チルチンスク に逐はしめたり。然れども、トブルジン は忽ち援兵を得て、再び アルバヂン に來り、帝も亦兵を發して、之を圍ましめしが、既にして露帝 アレキサンダー二世の、ゴロー井ン を派して、和を議せしむるに至り、帝は內大臣索額圖を遣はして、之と チルチンスク に會して、平和の條約を結ばしめ、悉く露人の侵地を恢復して、格爾必齊河を境界となせり。時に西紀千六百八十九年なり。

第三節 其の後、清廷は此の條約を賴みて、敢て意を北方に注がざりしが、露廷は悉伯利總督を置きて、舊來の南侵策

を講ぜしめ、殊に今世紀の半に至りては、僧正　インノケンチ
ー、將軍　ムライヨーフ　等の策士出でゝ、其の局に當り、先づ
黑龍江口の民を移して、　ニコライプスク　港を開き、尋で手
を伸ばして、我樺太島の北部を占領せり。
　既にして　クリミヤ　の役起り、英、佛二國の軍艦共に　オ
コツク　海に闖入せしかば、ムライヨーフ　は、益黑龍江を收
むるの必要を感じ、帝に申請して、黑龍江の運糧を試み、且つ
清國に迫りて、境界改定の議を開けり。時に清國は、內には
長髮賊の亂あり、外には英、佛の紛議ありて、北方を顧るに遑
あらざりしかば、一に露國に讓りて、愛琿條約を結び、悉く黑
龍江北の地を棄てゝ、松花、烏蘇里の二江を開けり。時に西
紀千八百五十八年なり。
　斯くて、愛琿條約は、其翌年を以て交換せられしと雖、尋で

清國は英、佛同盟軍の爲に迫られて、殆ど爲す所を知らざり
しかば、露國公使　イグナチエーフ　之に乘じて、頻に調停の勞
を執り、遂に其報として、烏蘇里江東の全地を得たり。時に
西紀千八百六十年なり。
第四節　既に前章に於て概言せし如く、露國は、此頃より
兵を中亞細亞に出して、頻に各地の族長を征服せしが、西紀
千八百七十年に至り、露將　ポルバコブスキー　は　カシガル
汗を誘出せんが爲に、其の渴望せる伊犂を占領せり。但し
露廷は、之が永遠の領有に意あらざりしを以て、使を清國に
遣はして、其の鎭兵を求めたりしと雖、當時清國は穆宗の世
にして、偶西域地方に大亂ありしかば、止むなく之を放棄し
て、偏に反徒の鎭定に從事せり。
　斯くて穆宗崩じて、光緒帝の立つに至り、清國は漸く各地

の反を定めて、伊犂還附の事を露國に迫り、先づ崇厚を派遣して、リワヂヤの假條約を結ばしめしが、其の讓歩過大にして、群議百出せしかば、乃ち之を廢棄して、更に曾紀澤を遣はし、償金九百萬ルーブルを出して、霍爾果斯河を疆界となすの約を結ばしめたり。時に西紀千八百八十一年にして、我明治十四年に當れり。

朝鮮と清との關係

第八章　朝鮮の獨立

第一節　初め清朝の、滿洲より起るや、朝鮮は援兵を出して、明を救はんことを謀りしと雖、其の將姜宏立の清に降るに及びて、事局全く素志と齟齬し、止むなく之と和を結んで、約して兄弟の國となれり。然れども、素と朝鮮は明の外藩にして、國初以來の關係極めて厚かりしを以て、竊に明を推戴して、其の命令を奉じたりしかば、清の太祖は之を怒りて、兵を八道に進め、憲文王を江華島に逐ひて、降を軍門に請はしめたり。所謂丁卯の變、即ち是なり。斯くて、朝鮮は陽に清に臣事せしと雖、尚ほ未だ明と離るゝこと能はずして、再び清の太宗の來伐を受け、降を瀋陽に請ふて、二王を質とし、清の正朔を奉じて、世々屬國の禮を執れり。

外難の初發

第十四地圖參照

第二節　西紀千八百三十三年以來、佛國の宣教師は朝鮮に入りて、天主教を傳へ、殊に英佛同盟軍の清國を攻むるに至りては、其の勢益盛なりしが、當時朝鮮は未だ鎖國の時代にして、之を憎むこと極めて甚しく、遂に宣教師を捕へて、之を虐殺すること數人に及びしかば、佛國之を聞きて、軍艦三隻を派遣し、江華灣の砲臺と、江華島の城砦とを攻陷して、以て其の怨に報ぜり。

朝鮮の開國

此頃、米人も亦平安道に於て、朝鮮人の殘虐に逢ひしかば、米國政府は、先づ其の公使をして、之を清廷に難詰せしめたり、然るに、清廷は朝鮮の自治を名として、其の交渉を避けしかば、米國政府は、乃ち佛國に倣つて、軍艦二隻を送り、江華島の砲臺三坐を攻陷して、朝鮮を威赫せり。

第三節　西紀千八百六十六年に當り、露國の軍艦朝鮮に來りて、始めて其の通商を求め、尋で米人も大同江に來りて、貿易を求めたりしが、朝鮮は、或は之を拒み、或は之を擊退せり、然るに日本は維新以來、頻りに朝鮮を誘導して、遂に其の港灣を開かしむるに至れり。

明治の初年に當りて、日本は使を遣はして、好を朝鮮に修めんとせしも、朝鮮は其書辭を疑ふて、敢て之に應ぜず、尋で日本は花房義質を釜山に遣はして、通商の事を議せしめしも、復要領を得ること能はざりしが、明治八年に至りて、日本の雲揚艦江華灣に投錨して、永宗島の砲臺より砲擊せられたりしかば、日本は黑田清隆及び井上馨を遣はして、之を詰問せしめ、且つ修交條約の事を嚴談せしめたり。是に於て、朝鮮は其の罪を陳謝して、始めて修交の約を結び、尋で通商章程を作りて、仁川、元山の二港を開けり。是れ實に朝鮮開國の始にして、又其の獨立の基なり。

鎭兵の暴動

第四節　初め朝鮮今王の、歲漸く長じて、政を親らするや、父大院君は王妃閔氏と合はずして、引退せしが、我明治十五年に至りて、京城の鎭兵を煽動し、先づ外戚閔氏の第を破りて、尋で王宮に亂入せしめたり。然るに亂徒は勢に乘じて、日本公使館を襲擊したりしかば、日本は井上馨を遣はして、其罪を問はしめ、遂に朝鮮をして、謝罪金五十五萬圓を出さ

しめ、且つ日本兵を、京城に置きて、公使館の護衛に充てんことを、承諾せしめたり。

天津條約

第五節　斯くて、日本は約に從ひて、兵士を京城に派遣せしかば、清國も之と同時に、二千餘人の兵を出して、京城に駐屯せしめたり。蓋し暗に日本兵に當らしめんと欲せしが爲なり。當時朝鮮の政界は二黨に分れ、一は事大黨と稱して、清國に依賴し、一は獨立黨と、稱して、日本に依賴せり。既にして、事大黨の諸臣、清將袁世凱と相結托して、益勢力を占むるに至り、獨立黨の領袖金玉均等は、憤怨に堪へずして、遂に之が暗殺を企て、國王を景祐宮に奉じて、日本公使の擁護を請へり。是を以て、公使竹添進一郎は、兵を率ゐて、王宮に赴きしが、清兵は事大黨に荷擔して、來つて之を襲ひ、日本公使館も、其の燒盡する所となれり。是に於て、日本は復た井上馨を朝鮮に遣はして、謝罪金十三萬圓を納めしめ、別に伊藤博文を清國に遣はして、善後の策を議せしめたり。博文乃ち李鴻章と天津に會見して、兩國互に朝鮮の兵を撤し、爾後若し之を出すの必要あらば、必ず相通告すべきことを約せり。所謂天津條約、即ち是なり。時に西紀千八百八十五年にして、我明治十九年なり。

日清の交戰

第六節　後ち我明治二十七年に至り、朝鮮に東學黨の亂起りて、清國は援兵を牙山に送りしかば、日本も亦兵を京城に出して、其の居留國民を保護せしめ、且つ公使大鳥圭介を遣はして、韓政の改革を圖らしめたり。然るに、清國欽差總辨袁世凱は、之と意見を異にして、朝鮮を清國の外藩となし、將に日本を排して、往時の關係を復せんとせしかば、兩國の平和遂に破れて、互に兵を朝鮮に出せり。

斯くて、日軍の將山縣有朋は、直に朝鮮の清兵を擊退して、九連城に向ひ、伊東祐亨は、之と同時に北洋艦隊を擊破して、威海衞に退隱せしめ、尋で大山巖は第二軍を率ゐて、花園口に上陸し、第一軍は九連城、鳳凰城等を略して、海城に出で、第二軍は、金州、旅順口、等を陷れて、蓋平に進み、遂に共に力を合せて、牛莊及び田庄臺を下し、更に別隊は路を分ちて、一は澎湖島を略し、一は威海衞を拔き、海陸力を合せて、將に直隷省に擊入せんとせり。

是に於て清廷は事の爲す可らざるを知りて、媾和の議を定め、李鴻章を全權大臣となして、日本に派遣し、伊藤博文及び陸奥宗光と馬關に會見して、平和の條約を結ばしめ、朝鮮の獨立を確認し、償金二億兩を拂ひ、遼東半島及び臺灣、澎湖の二島を割き、且つ沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開きて、漸く其局を結べり。時に明治二十八年なり。

然るに、露西亞、獨逸、佛蘭西の三國は、遼東半島の割讓に異議を挿み、共に同盟を結びて、其の領有を永遠にせざらんことを、日本に勸めたりしかば、日本は之を納れて、後ち遼東半島を清國に還附せり。

中學東洋歴史　終

明治三十三年三月廿五日印刷
仝　年三月廿八日發行

中學東洋歷史
實價金七拾錢

著者　福井縣小濱町日吉町十番地　松井濵八
東京市赤阪區青山南町三丁目五十三番地

著作權所有者　松島剛
東京市日本橋區通四丁目五番地

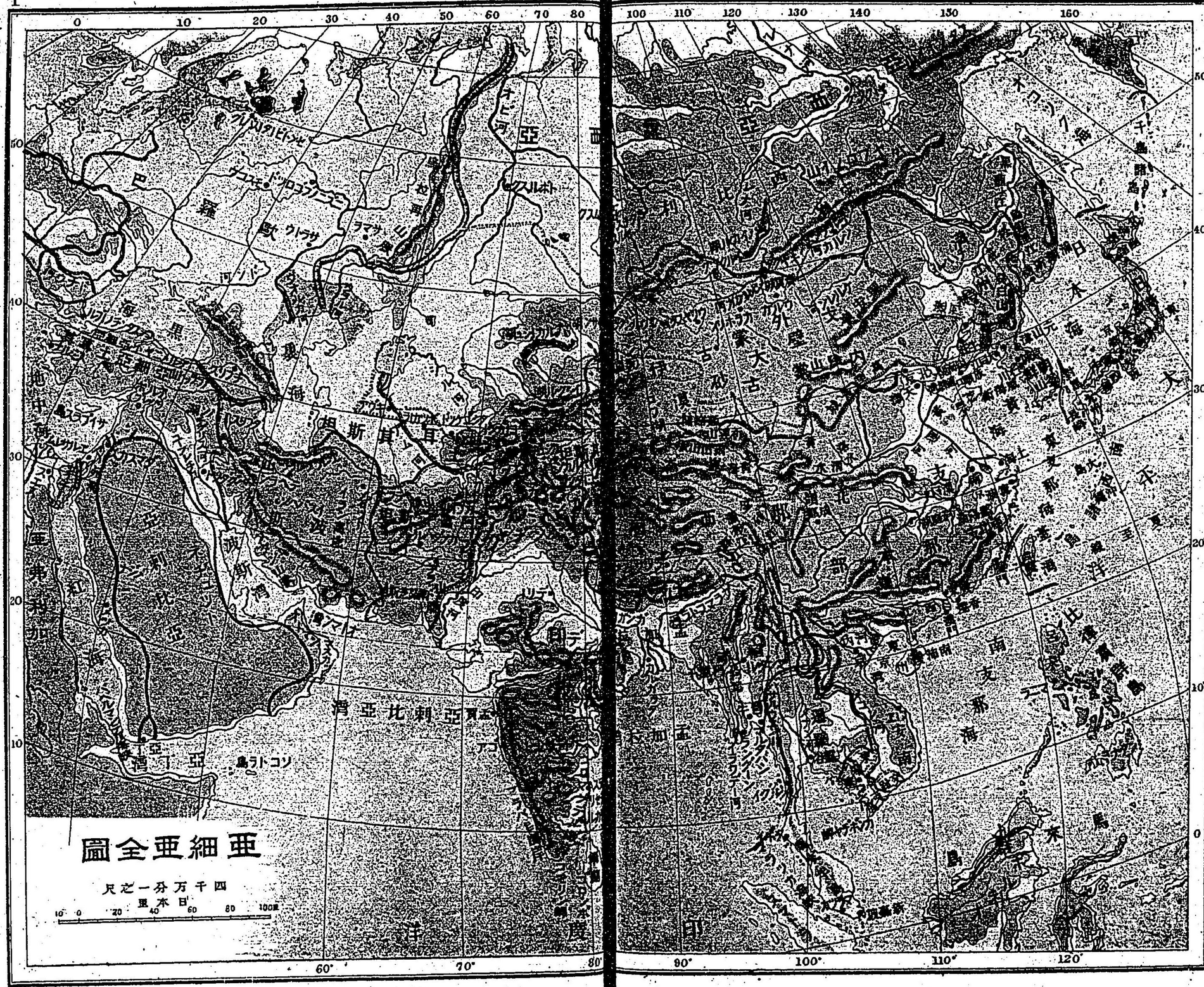
發行者　和田むゑ
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

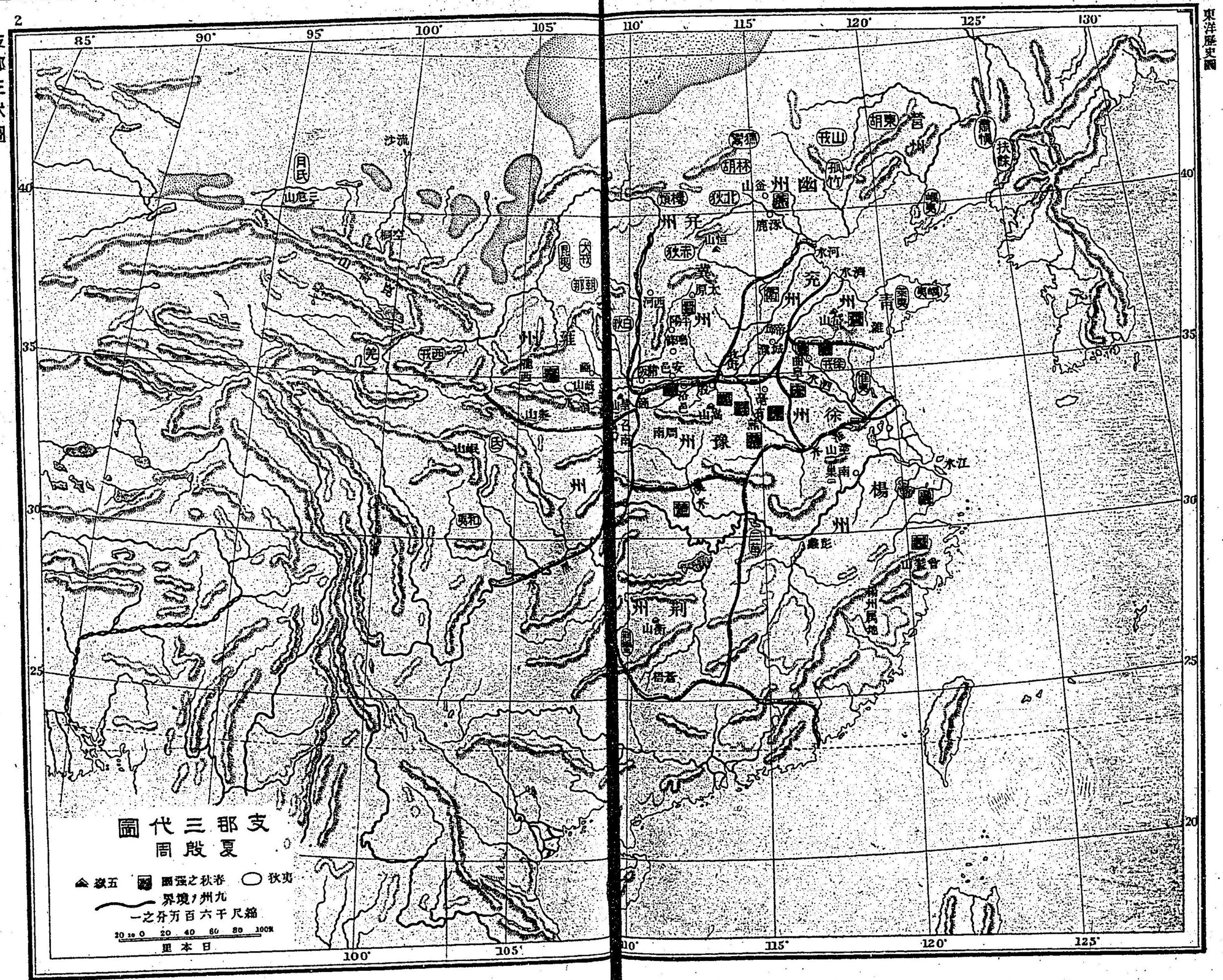
印刷者　佐久間衡治
東京市日本橋區通四丁目五番地

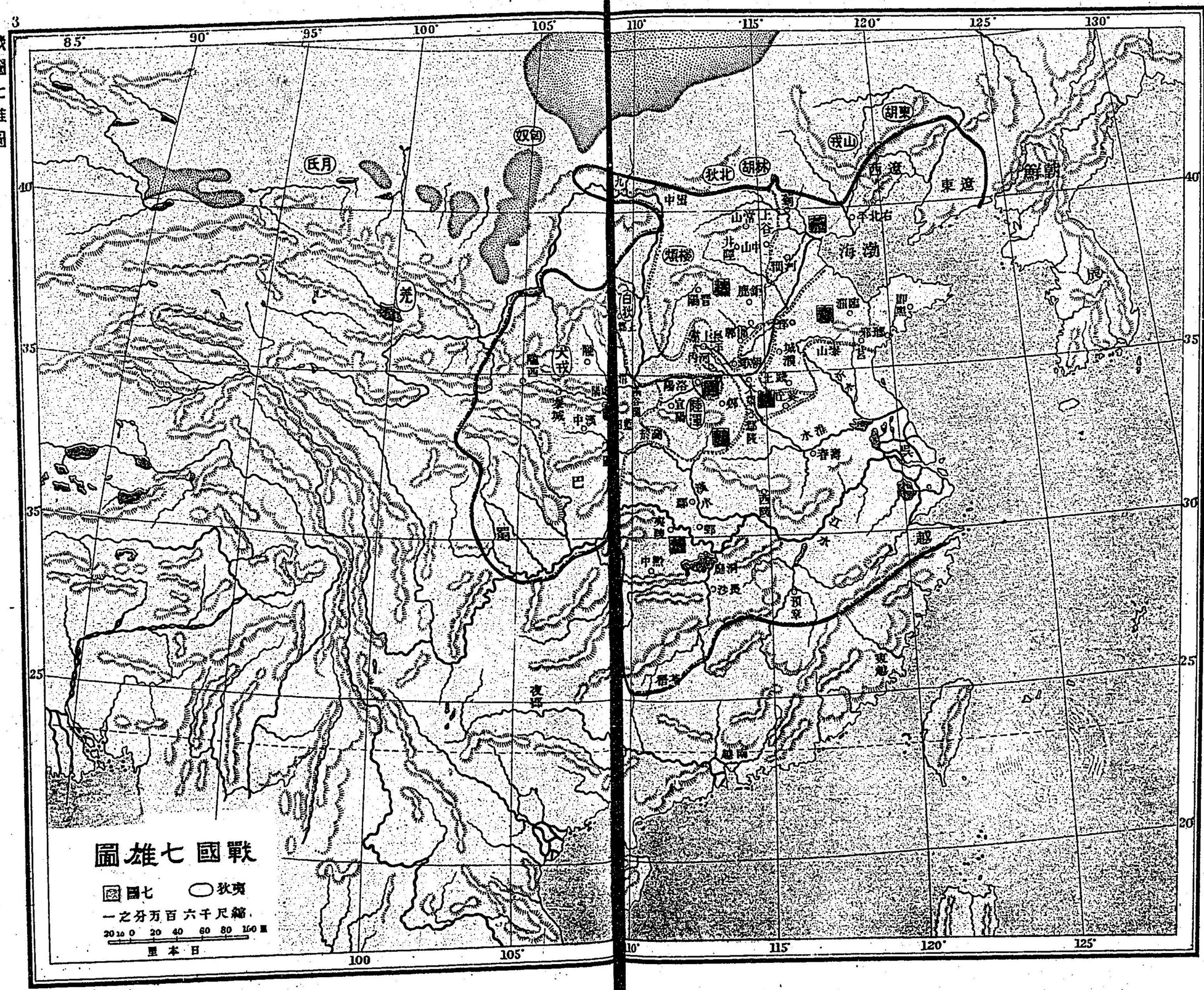
發行所　春陽堂
（電話本局五十一番）

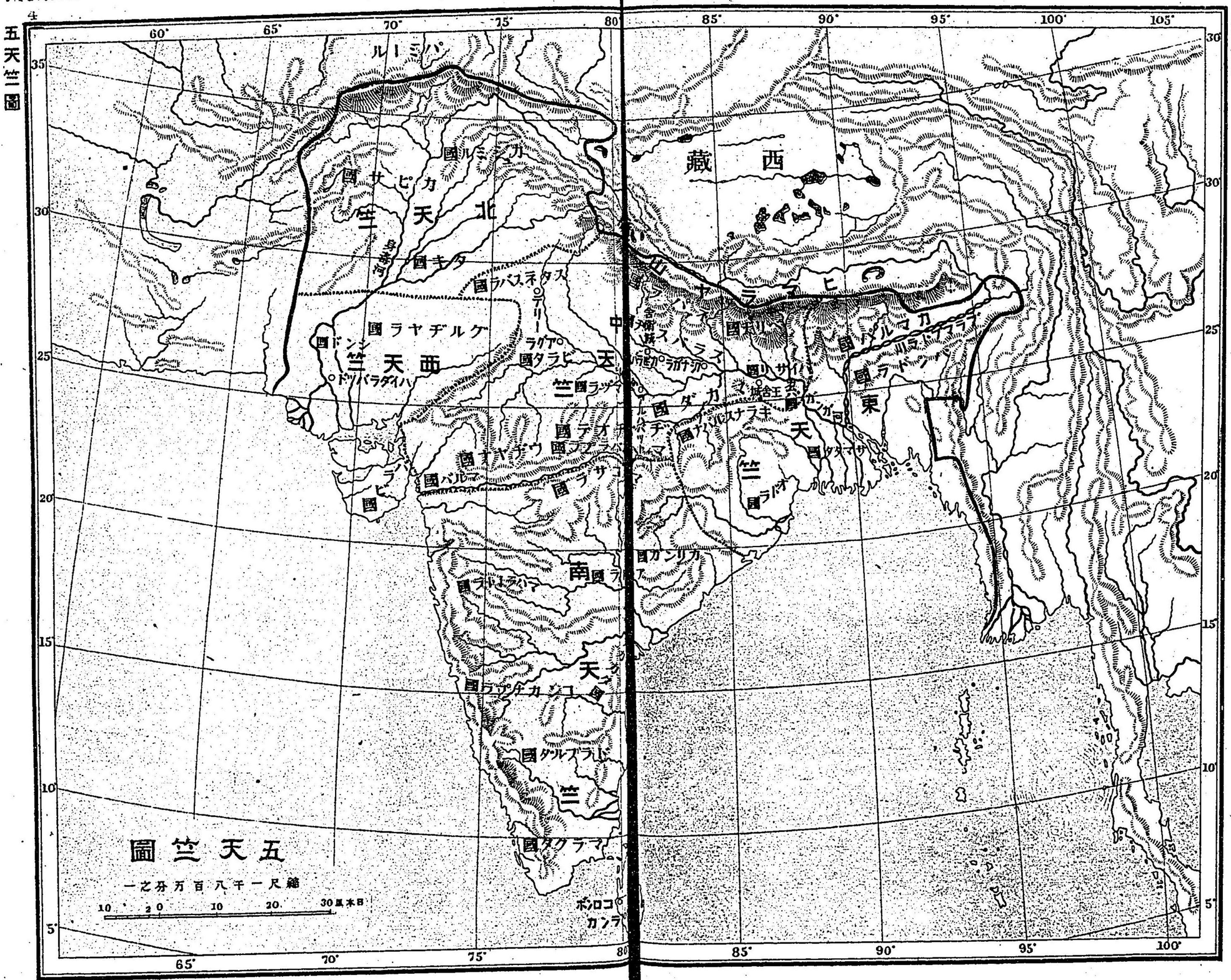
印刷所　東京市牛込區市谷加賀一丁町目十二番地
株式會社　秀英舍第一工場
（電話番町十九番）

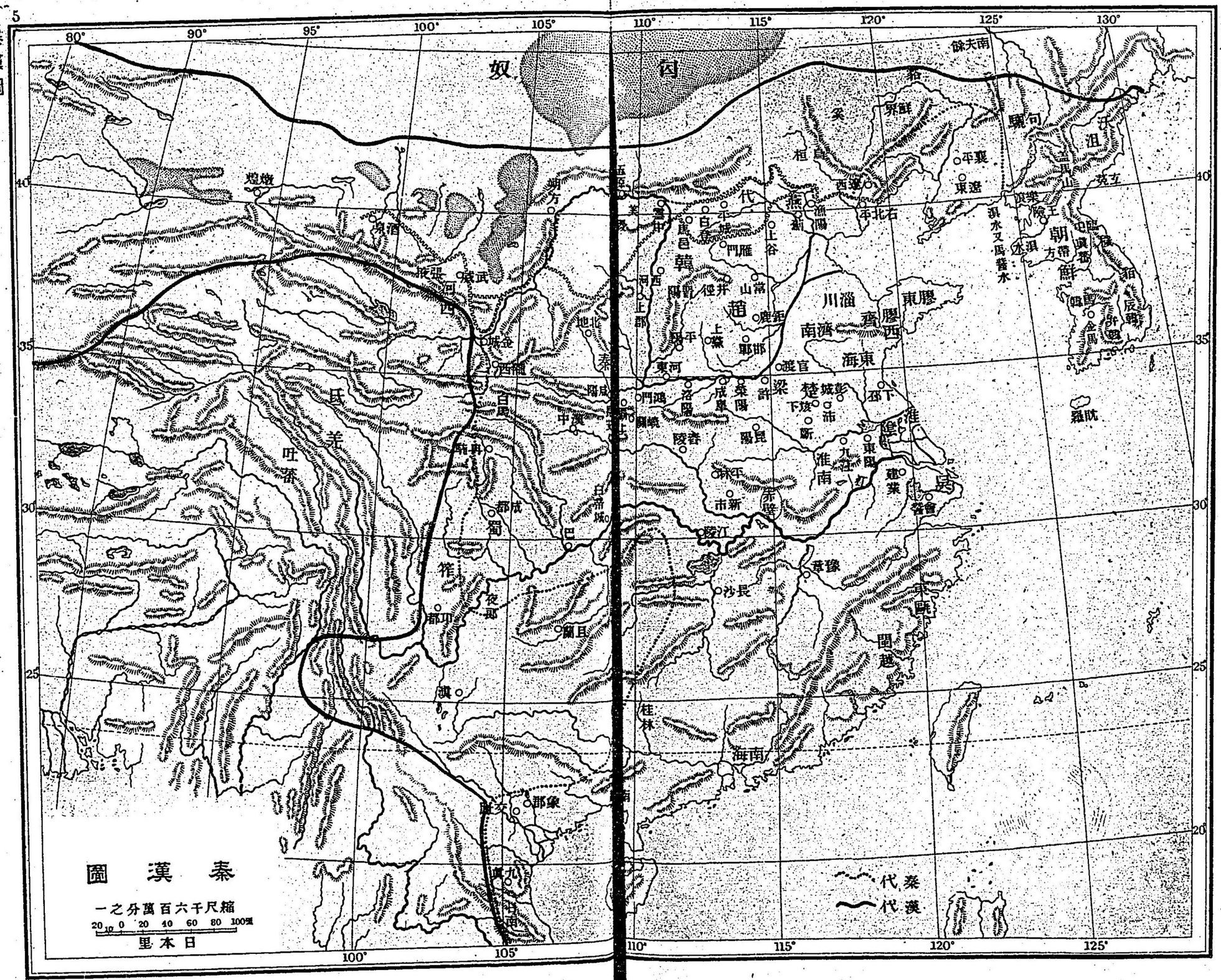
○此書は版權を所有せり
○此欄内に松島氏の印を認めざるものは偽版なり

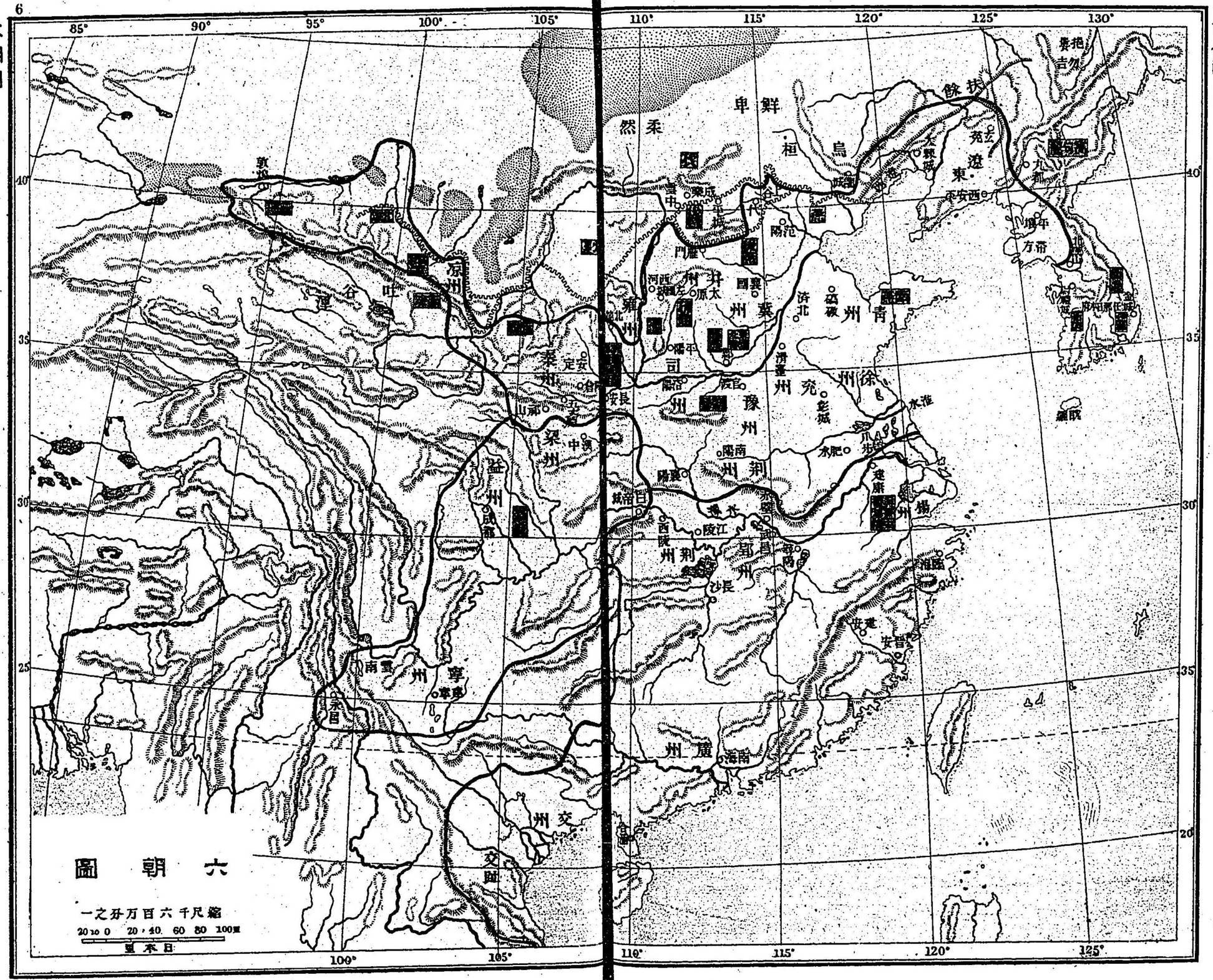

亞細亞全圖
尺之一分万千四
日本里
黑海
地中海
紅海
波斯灣
亞拉比亞灣
印度洋
南支那海
太平洋
日本海
東部西伯利亞
外蒙古
內蒙古
新疆
西藏
印度
土耳其
亞拉比亞
亞美利加
亞弗利加
亞細亞
亞美利加
亞弗利加
亞細亞
亞美利加
亞弗利加
亞細


支那三代圖
周殷夏
五狄
國強之秋春
狄夷
九州境界
一之分万百六千尺縮
日本里
85°
90°
95°
100°
105°
110°
115°
120°
125°
130°
40°
35°
30°
25°
20°
月氏
三危山
沙流
桐空
山
黃河
大秦
朝鮮
雍州
羌
西戎
隴西
山岐
山秦
山梁
山岷
氐
州
梁州
和夷
冀州
幽州
并州
營
東胡
山北
山
孤竹
山
山
鹿泽
山
山
水河
水
河西
原太
州
山
山
山

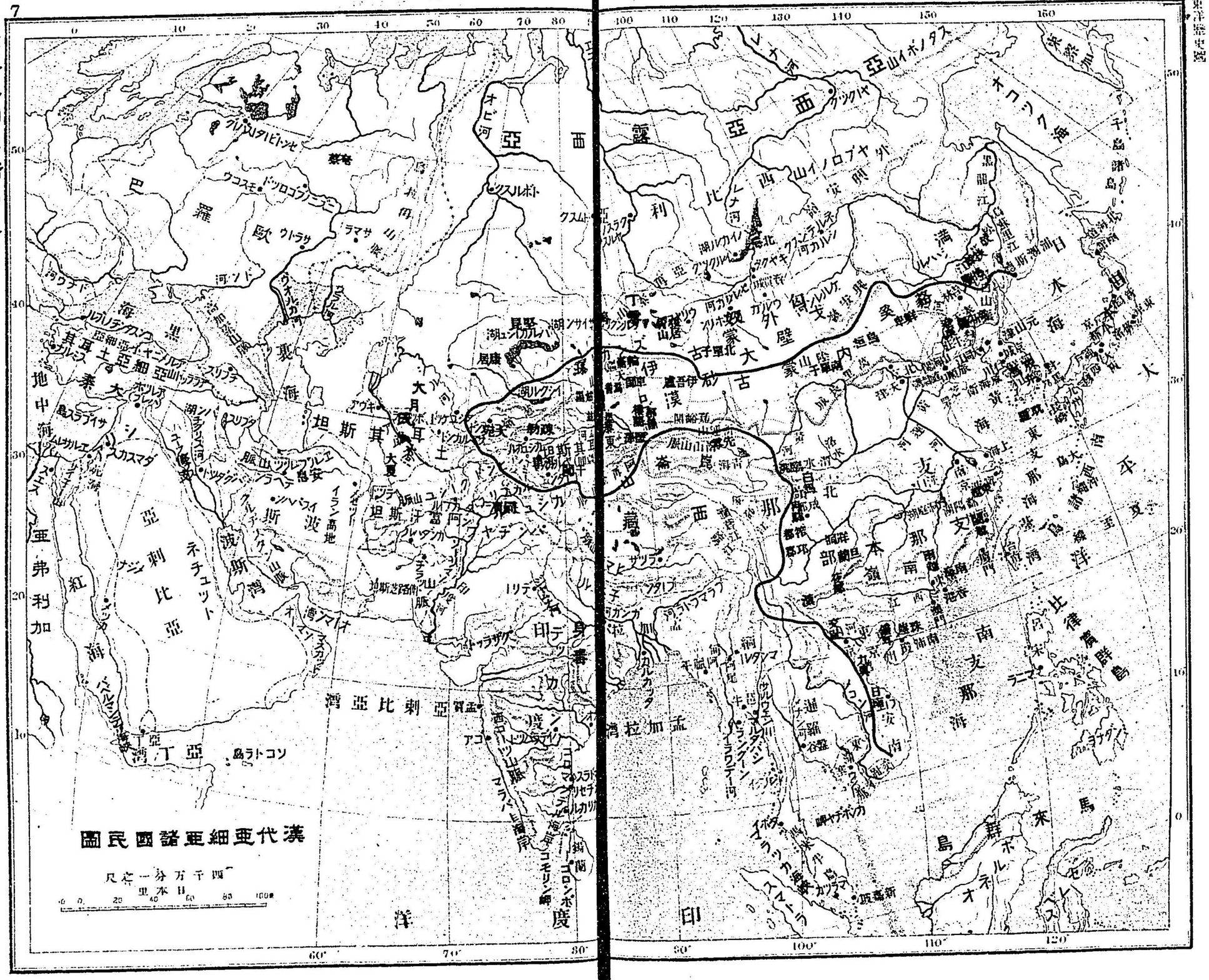

戰國七雄圖
七國
夷狄
縮尺千六百万分之一
日本里
氏月
匈奴
羌
大戎
巴
蜀
夜郎
東胡
代山
遼西
遼東
朝鮮
燕
秦
趙
魏
韓
楚
齊
越
渤海
中山
上谷
常山
北平
右北平
鹿臺
邯鄲
即墨
臨淄
城濮
宜陽
函谷關
新鄭
大梁
陶
睢陽
壽春
淮水
江水
郢
鄢
西陵
中郢
長沙
會稽
東越
南越
琉球

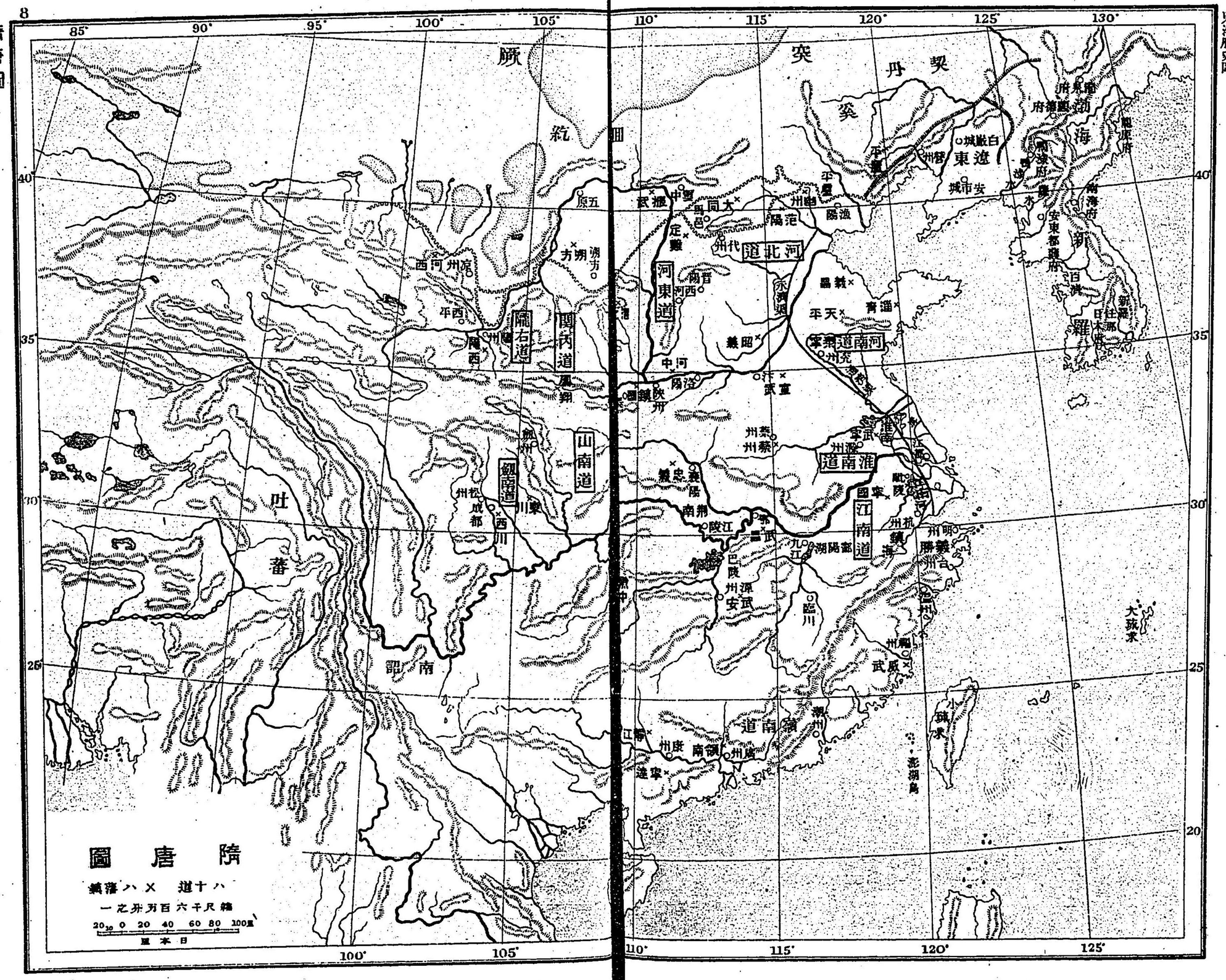

五天竺圖
縮尺一千八百万分之一
日本里30
ルミパ
國ルミカ
國サピカ
北天竺
國キタ
身毒河
國ラバスネタス
デリー
國ラヤヂルゲ
國ドンジ
西天竺
ドツバラダイハ
ラヂア
國タラビ
天竺
國ラツマ
國デオ
國オバンウ
國ブラバ
國バルー
國ラサコ
ラビ國
國ラトラバ
南國ラ
國ラプタカンコ
天竺
國タルブラ
竺
國タクラマ
ボンロコ
カンラ
藏西
國ルマカ
國ラドブラブ
國ラドバ
國ダカ
國ナバスナラキ
國タタマザ
國ラドオ
國カンリカ
東天竺
30°
25°
20°
15°
10°
5°
60°
65°
70°
75°
80°
85°
90°
95°
100°
105°

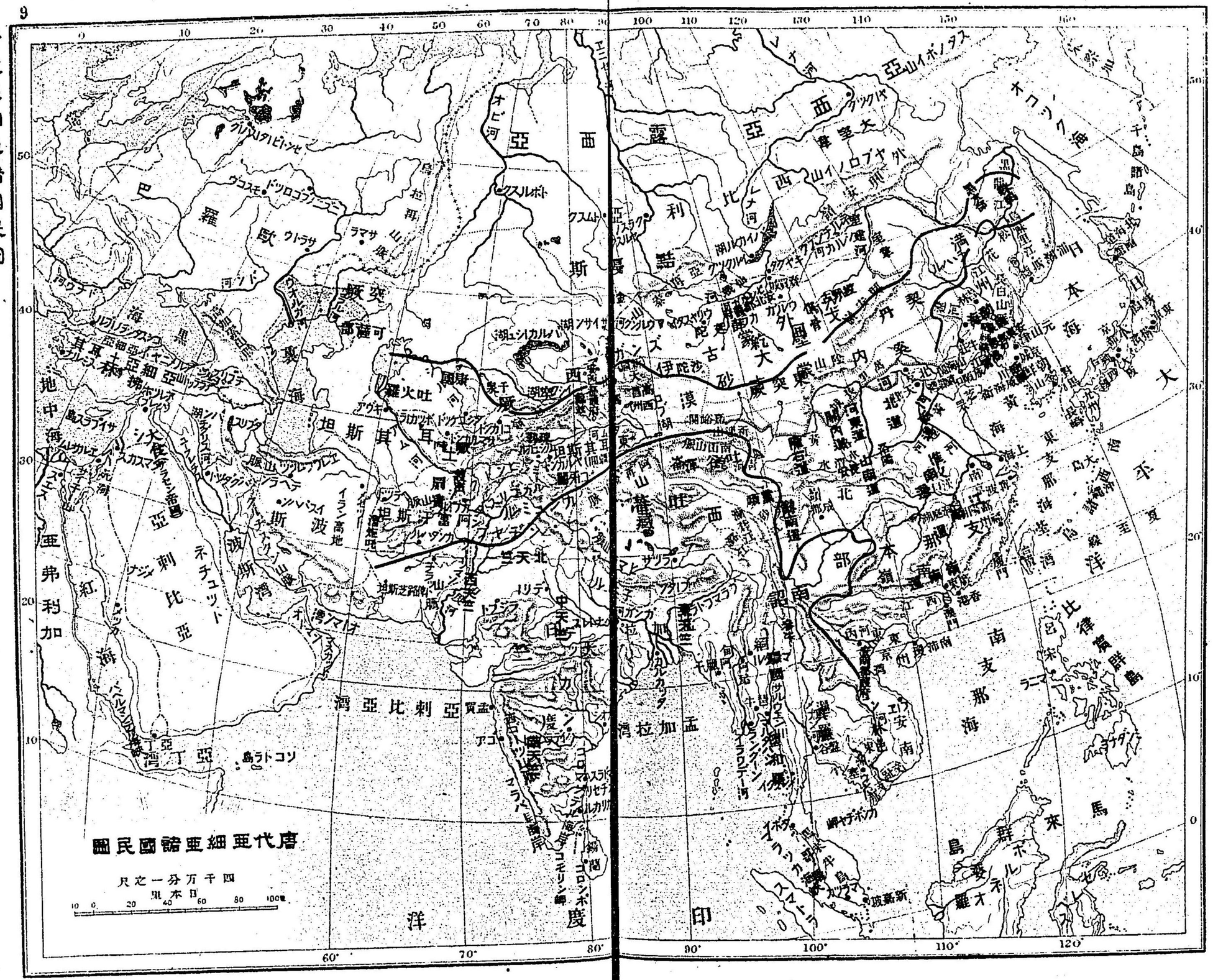

秦漢圖
縮尺千六百萬分之一
日本里
20 10 0 20 40 60 80 100
代秦
代漢
匈奴
烏孫
月氏
羌
吐蕃
南夫餘
高句麗
朝鮮
倭
新羅
百濟
高麗
遼東
平壤
樂浪
玄菟
真番
臨屯
帶方
遼西
右北平
漁陽
上谷
代
趙
常山
鹿臺
邯鄲
上黨
太原
雁門
平城
白登
馬邑
韓
河西
上郡
北地
隴西
天水
金城
酒泉
張掖
武威
西河
關中
咸陽
成都
蜀
巴
漢中
南郡
夜郎
滇
且蘭
桂林
海南
象郡
九真
日南
東海
齊
膠西
膠東
川淄
南濟
琅琊
東河
梁
許
滎陽
成皋
洛陽
陵睢
昆陽
鴻門
關嶺
彭城
下邳
淮陰
淮南
九江
東冶
建業
會稽
閩越
東瓯
豫章
長沙
武陵
臨淮
廣陵
泰山
琅琊
碣石
朝鮮
遼東
玄菟
樂浪
真番
臨屯
帶方
金馬
澎湖
沛縣
高句麗
南夫餘
80° 90° 95° 100° 105° 110° 115° 120° 125° 130°
40° 35° 30° 25° 20°

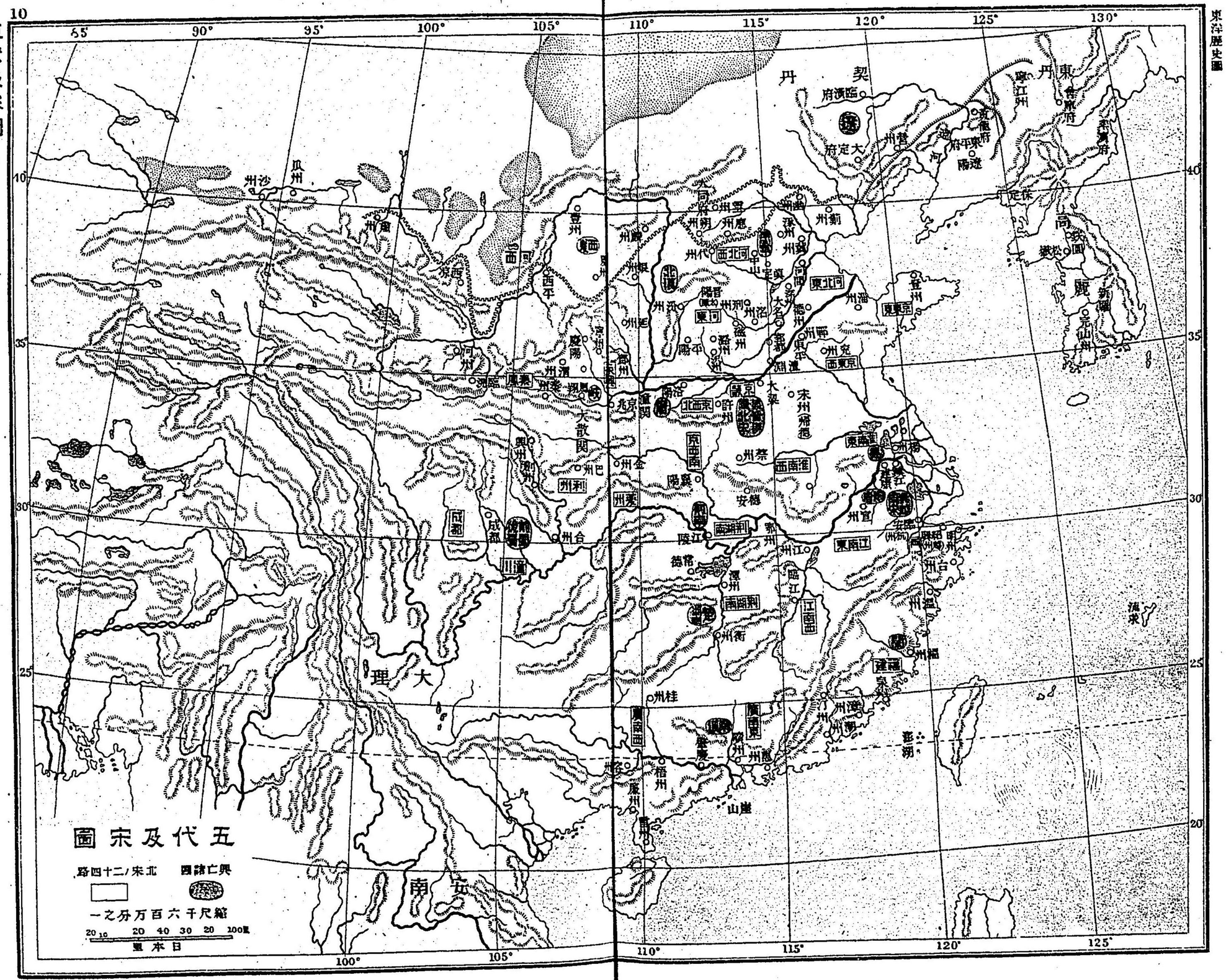

六朝圖
縮尺千六百万分之一
20 10 0 20 40 60 80 100里
日本里
85° 90° 95° 100° 105° 110° 115° 120° 125° 130°
40° 35° 30° 25° 20°
柔然
鮮卑
烏桓
扶餘
挹婁
吉勿
遼東
玄菟
平城
雲中
涼州
吐谷渾
秦州
定安
梁州
益州
成都
雍州
長安
司州
洛陽
荊州
襄陽
南陽
豫州
陽城
兗州
彭城
徐州
青州
濟北
冀州
太原
滑臺
水肥
建康
揚州
江陵
西陵
沙長
鄂州
湘陵
安建
安昌
南雲州
寧州
寧康
永昌
廣州
海南
交州
交趾
日本

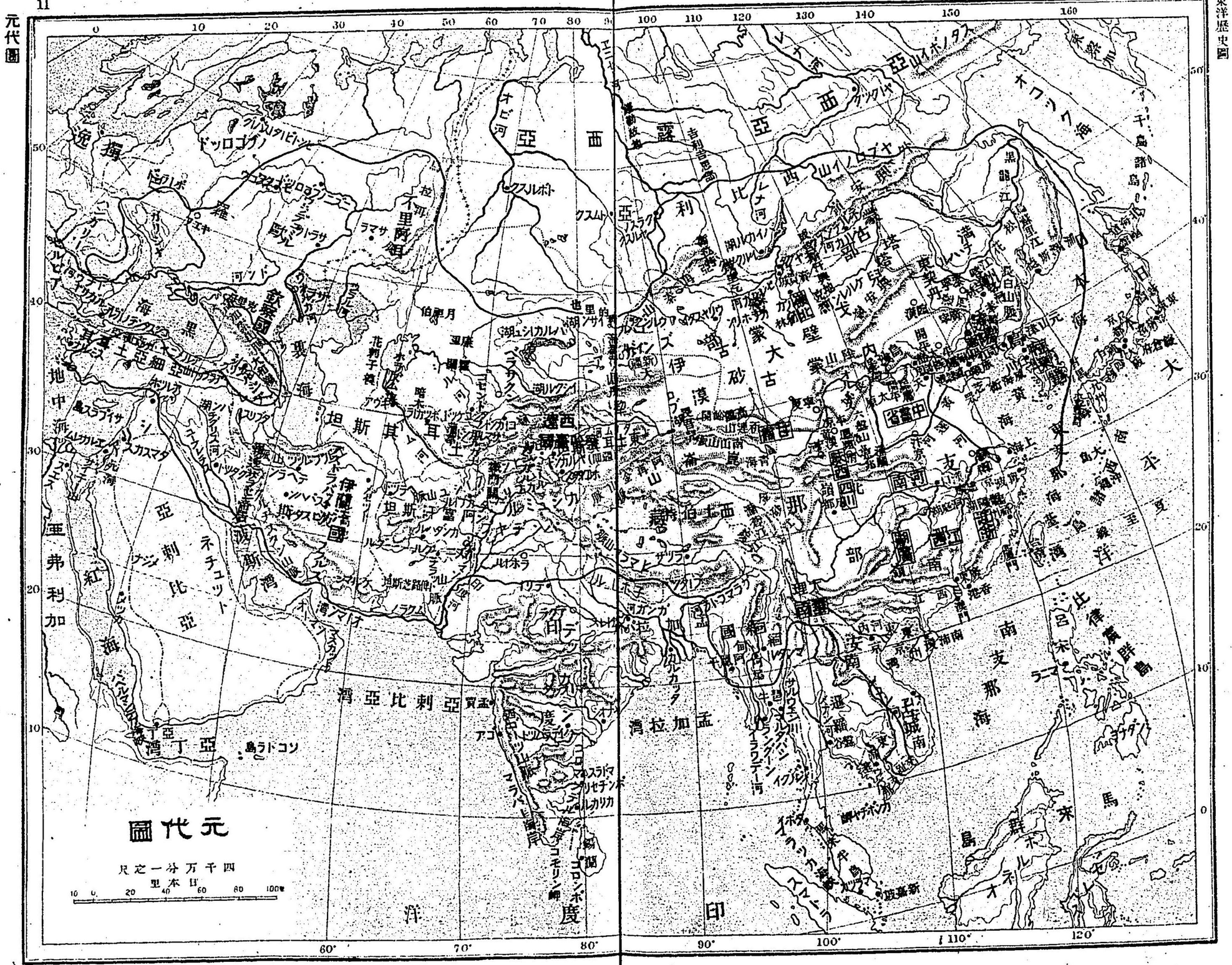
漢代亞細亞諸國民圖

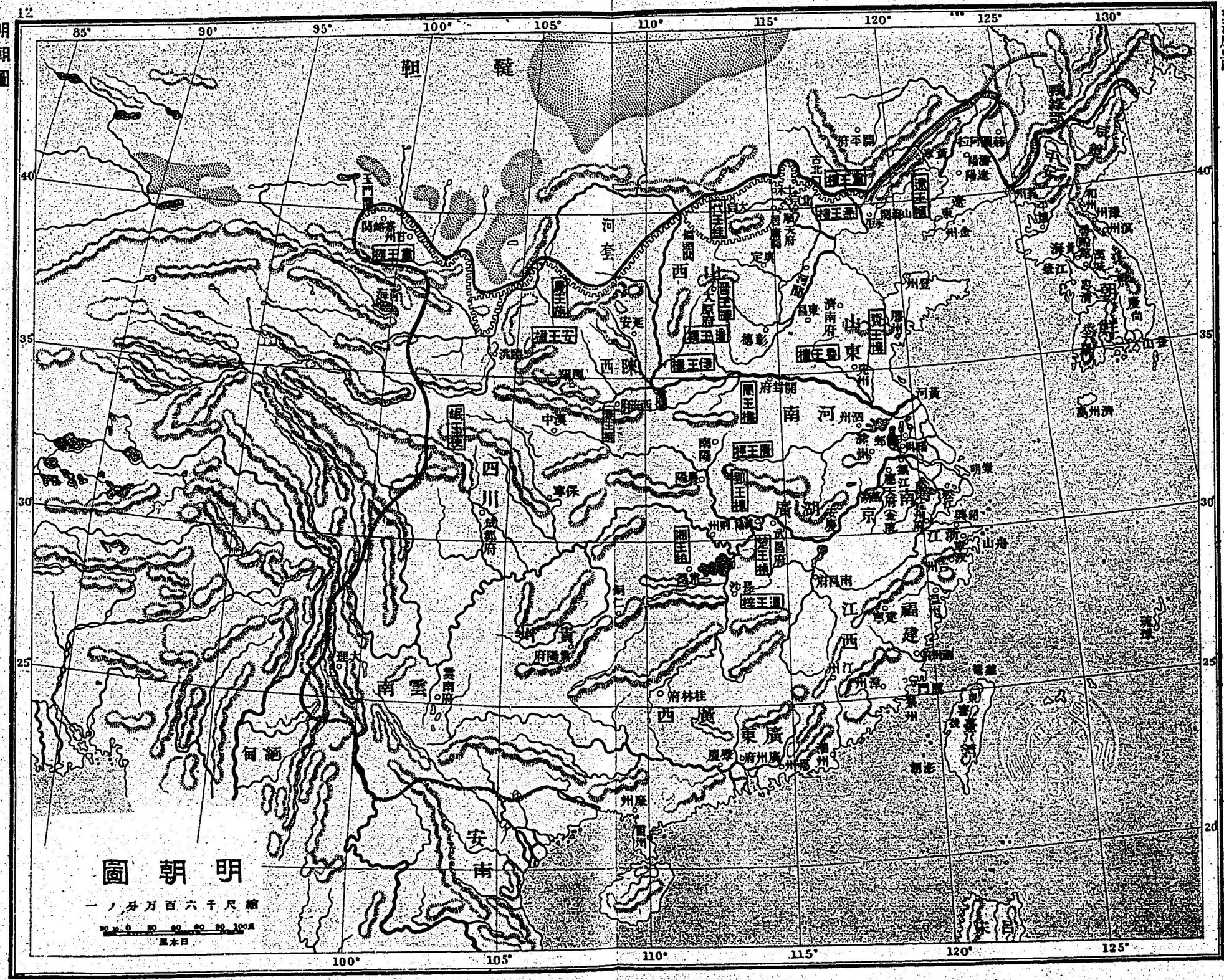

漢代亞細亞諸國民圖
尺度一分万千四
里本日
亞西
露西亞
巴羅歐
黑海
裏海
地中海
紅海
亞弗利加
亞刺比亞
波斯灣
印度
孟加拉灣
亞刺比亞灣
印度洋
大月氏
烏孫
大夏
安息
康居
烏丸
匈奴
大漠
古長城
內蒙古
滿洲
朝鮮
日本海
黃海
東支那海
南支那海
比律賓群島
暹羅
安南
緬甸
印度支那
馬來半島
蘇門答臘
爪哇
婆羅洲
新幾內亞
澳大利亞
太平洋
大食
波斯
土耳其
亞細亞土耳其
黑海
裏海
紅海
亞弗利加
亞刺比亞
波斯灣
印度洋
孟加拉灣
亞刺比亞灣
亞丁灣
亞丁
印度
緬甸
暹羅
安南
南支那海
比律賓群島
馬來半島
蘇門答臘
爪哇
婆羅洲
新幾內亞
澳大利亞
太平洋
日本海
黃海
東支那海
南支那海
滿洲
朝鮮
內蒙古
古長城
大漠
烏孫
烏丸
匈奴
大夏
安息
康居
大月氏

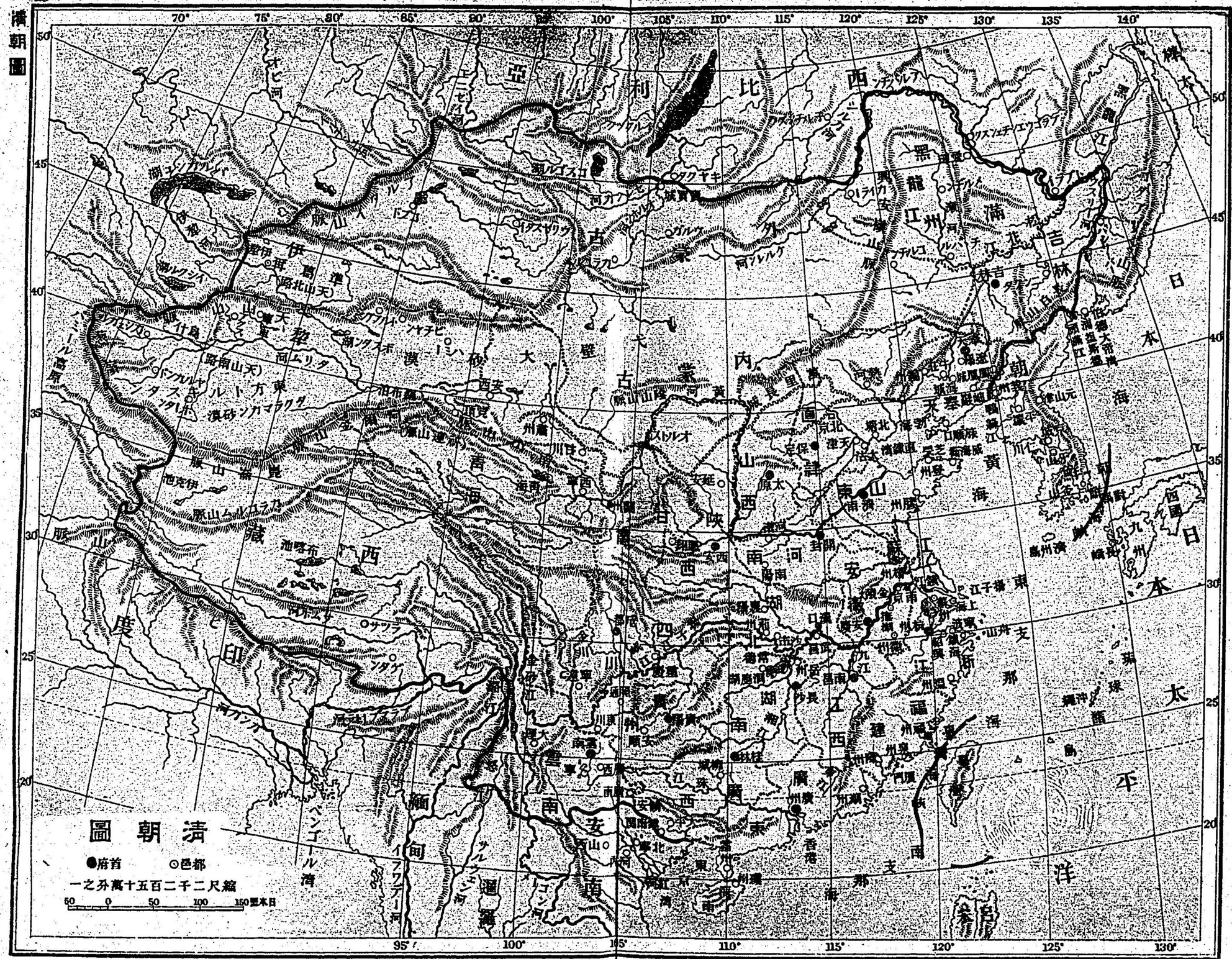

隋唐圖
八十道 又八落羅
一之分万百六千尺縮
日本里
85° 90° 95° 100° 105° 110° 115° 120° 125° 130°
40° 35° 30° 25° 20°
突厥
契丹
奚
靺鞨
渤海
新羅
吐蕃
南詔
河東道
河北道
關內道
隴右道
山南道
劍南道
河南道
淮南道
江南道
嶺南道
東都
西都
太原
長安
洛陽
大琉求
小琉求
澎湖島


唐代亞細亞諸國民圖
四千万分一之尺
日本里
露西亞
北西利亞
大興安嶺
滿洲
支那本部
南支那海
印度支那
馬來半島
羅刹
波斯
土耳其斯坦
亞刺比亞
印度
孟加拉灣
亞刺比亞灣
紅海
黑海
裏海
地中海
大食帝國
亞丁灣
亞丁
亞弗利加
ソコトラ島
ラニマ
ボルネオ
ジャワ
スマトラ
ビルマ
ゴビ沙漠
ウラル山脈
ヒマラヤ山脈
ペルシャ灣
ベンガル灣
ゴロンボ
ボンベイ
ムルタン
ラホール
ペシャワル
ヒバ
ブハラ
サマルカンド
タシケント
ヤルカンド
ハミ
ウルムチ
ハルビン
ペキン
ペシャワル
ラングーン
バンコク
ハノイ
ジャカルタ
シンガポール
ペナン
ヒロシマ
ナガサキ
ウラジオストク
ハバロフスク
ペトロパブロフスク
ヤクツク
ヤクツク海
オホツク海
日本海
黄海
東支那海
南支那海
太平洋
印度洋
60°
70°
80°
90°
100°
110°
120°


五代及宋圖
路四十二ノ宋北
國諸亡興
一之分万百六千尺縮
日本里
大理
南安
丹契
高麗
東洋
黃海
渤海
東京
西京
南京
北京
成都
川蜀
荆州
利州
合州
巴州
金州
梁州
興州
秦州
鳳州
河州
沙州
瓜州
涼州
鄯州
靈州
夏州
宋州
許州
鄭州
汴州
大梁
鄆州
青州
登州
萊州
密州
沂州
徐州
揚州
楚州
廬州
蘄州
鄂州
安陸
荆州
襄陽
隨州
安州
黃州
江州
洪州
吉州
袁州
撫州
虔州
福州
泉州
建州
漳州
廣州
桂州
梧州
雲州
大同
代州
忻州
定州
中山
真定
大名
德州
鄆州
濟州
兗州
東平
陽平
東阿
東昌
高唐
平陸
陵江
德常
潭州
衡州
鄂州
江州
臨江
明州
台州
溫州
福州
泉州
廣州
山南東
山南西
關內
河東
河北
淮南
江南東
江南西
荆湖南
荆湖北
嶺南東
嶺南西
東南道
西南道
東北道
西北道
東京
西京
南京
北京
東平
東阿
東昌
高唐
平陸
陽平
大名
德州
鄆州
濟州
兗州
登州
萊州
密州
沂州
徐州
揚州
楚州
廬州
蘄州
鄂州
安陸
荆州
襄陽
隨州
安州
黃州
江州
洪州
吉州
袁州
撫州
虔州
福州
泉州
建州
漳州
廣州
桂州
梧州
雲州
大同
代州
忻州
定州
中山
真定


元代圖
四千万分一定尺
日本里
亞西
亞西北利
蒙古
大沙漠
伊犁
內蒙古
滿洲
中華
安南
暹羅
緬甸
印度
孟加拉灣
亞刺比亞
亞刺比亞灣
亞丁灣
紅海
地中海
黑海
裏海
亞細亞土耳其
亞丁
印度洋
太平洋
日本海
黃海
東支那海
南支那海
呂宋
比律賓群島
臺灣
海南島
馬來半島
錫蘭島
ゴンドワナ
ユーラシア
ボルネオ
ニューギニア
ニューカレドニア
ニュージーランド
ハワイ
千島諸島
ベーリング海
オホツク海
ドッロゴノ
ウラルスク
ヴォルガ
ヴォルガ河
ヴォルガ河
ヴォルガ河


明朝圖
韃靼
河套
西山
陝西
四川
河南
山東
朝鮮
湖廣
南京
江西
福建
雲南
貴州
廣西
廣東
安南
緬甸
琉球
朱印
遼王
寧王
代王
晉王
秦王
慶王
楚王
蜀王
湘王
荊王
鄭王
周王
魯王
衛王
韓王
安王
肅王
寧夏
大同
太原府
開封府
濟南府
武昌府
南京
應天府
金陵
杭州
紹興
寧波
福州
泉州
廣州
桂林府
雲南府
成都府
重慶
開平
北京
順天府
定襄
遼東
山海
明崇
一ノ分万百六千尺縮
日本里


清朝圖
●府首 ⊙邑都
縮尺二千二百五十萬分之一
50 0 50 100 150里本日
亞
利
比
西
伯
利
亞
古
蒙
古
內
蒙
古
滿
洲
朝
鮮
日
本
海
黃
海
東
支
那
海
太
平
洋
西
藏
印
度
緬
甸
安
南
暹
羅
新
疆
甘
肅
陝
西
山
西
河
南
四
川
雲
南
貴
州
湖
南
湖
北
廣
東
廣
西
江
西
安
徽
江
蘇
浙
江
福
建
臺
灣
琉
球
島
朝
鮮
半
島
日
本
四
國
九
州
ベンゴール灣
ベンガル高原
ヒマラヤ山脈
崑崙山脈
天山山脈
大砂漠
黑龍江
吉林
遼寧
內蒙古
外蒙古
新疆
西藏
青海
甘肅
陝西
山西
河南
四川
雲南
貴州
湖南
湖北
廣東
廣西
江西
安徽
江蘇
浙江
福建
臺灣
琉球
朝鮮
日本
四國
九州
北京
天津
奉天
吉林
長春
哈爾濱
齊齊哈爾
黑龍江
興安
龍江
滿洲
內蒙古
外蒙古
新疆
西藏
青海
甘肅
陝西
山西
河南
四川
雲南
貴州
湖南
湖北
廣東
廣西
江西
安徽
江蘇
浙江
福建
臺灣
琉球
朝鮮
日本
四國
九州
太平洋
黃海
東支那海
南支那海
ベンゴール灣
ベンガル高原
ヒマラヤ山脈
崑崙山脈
天山山脈
大砂漠
黑龍江
吉林
遼寧
內蒙古
外蒙古
新疆
西藏
青海
甘肅
陝西
山西
河南
四川
雲南
貴州
湖南
湖北
廣東
廣西
江西
安徽
江蘇
浙江
福建
臺灣
琉球
朝鮮
日本
四國
九州
95° 100° 105° 110° 115° 120° 125° 130°

六百万分一之尺

10 5 0 10 20 30里
日本尺

۲۵۶
۲۵۷

86
151

003306−000−5

86−151

中学東洋歴史

松井　浪八／編

M33

ACC−1729